



記録 生協の
つながる力
2013

これからも 共に生きていく

本誌「記録・生協の『つながる力』2013」は、2013年度の生協の震災復興支援（2014年1月時点）についてとりまとめたもので、2011年度版、2012年度版についての資料集第3弾となります。

2011年、いわて生協のマリンコープDORAの店内に、岩手県立宮古高等学校の生徒たちが書いた「共に生きる」というスローガンが掲示されました。

○共に生きる

私達は過去から学び、力をあわせて、未来を創ります

明日に向かって、諦めることなく、前に進みます

志を高くもち、岩手を守るために頑張ります……

「共に生きる」とそれぞれが決意した日から3年がたとうとしています。

しかし、被災地の真の復興は、いまだ道半ばにあります。逆に、時間の経過とともに、補償の格差や復興計画の地域による違いが住民同士の軋轢を生むなど、深刻さを増している部分も表れてきています。

本誌第Ⅰ部では、震災発生から2年間の経緯をあらためて振り返り、第Ⅱ部では、2013年の生協の「つながる力」の発揮の様子について記しました（注）。

被災地へ赴きボランティア活動を行なう人、被災地から離れている場所でできることは何かと考え贈り物を届ける人、生協の事業を通じての支援方法を考える人——それぞれの置かれた状況・条件で支援の形は違いますが、さまざまな形で被災地復興への取り組みが展開されました。将来を担う子どもたちへの支援や県外避難をしている方への支援も行なわれています。そして、それぞれの生協の組合員が、職員が、こうした支援活動をこれからの自分たちの地域社会づくりを考えるきっかけにしています。

第Ⅲ部では、日本福祉大学の村上徹也教授から、今後の継続した生協の支援活動について提言をいただき、最後に、全国の仲間からの力強いメッセージを掲載しました。

2014年、「共に生きる」決意をあらためてかため、全国の生協の役職員・組合員は途切れることのない被災地への支援を続けていきます。

（注）

第Ⅱ部の各生協の取り組みの詳細については、昨年度同様、日本生協連のウェブサイト「復興支援ポータルサイト」内の「WEB 生協・東日本大震災被災地復興支援資料集」（「日生協 復興支援資料集」のキーワードまたはURL <<http://shinsai.jccu.coop/tsunagaru>>で検索）に掲載しています。（各章の最後のページに、主な情報のタイトルとサイト上の資料番号について記載しています。）



【表紙の写真】

岩手県の沿岸部にある気仙地域は、津波による甚大な被害を受けた。毎年8月6、7日にこの地域で行なわれる七夕まつりは、死者の霊を弔う鎮魂の意味があるとともに、地域コミュニティを維持するために欠かせない取り組みである。コープあいちは、2011年から継続して、大船渡市の「盛町灯ろう七夕まつり」と陸前高田市の「うごく七夕まつり」を支援してきた。写真は2013年8月6日に「盛町灯ろう七夕まつり」で行なわれた「願いごとふうせん」。大空にたくさんの願いを乗せた風船が舞った。

復興の現状	2
-------	---

I 震災発生、そして復興へ

2011年	4
2012年	7

II 継続支援の誓い 2013年

1.被災地への支援	石巻の仮設住宅で正月餅つき大会	10
	福島県川内村への移動店舗を開始	10
	仮設住宅の方の手芸品の販売ルートを作り出す	11
	「お好み焼き隊」が生協の心・味・歌をお届け	12
	被災地に継続してボランティアバスを運行	12
	土壌スクリーニングプロジェクトに新コース	13
2.生産者と共に復興を目指す	宮城県・志津川漁港の生産者を継続支援	16
	福島の漁業復興を目指し取り組み状況を発表	16
	長野県栄村の復興を願い「福幸そば」販売	17
	福島県産品4品目を供給し福島県の農業を支える	18
	2012年度「買って支える」取り組み調査結果	18
	復興の年越しそばで新年を「わたりのそばプロジェクト」	19
3.子どもたちの未来のために	福島の子どものための保養プロジェクト	21
	復興を担う次世代を支援「海の虹プロジェクト」	21
	被災地の中高生とフォーラムで意見交換	22
	全国生協の支援金で、食育活動を実施	23
	手作りおもちゃを被災地の子どもたちへ	23
	「学校図書館げんきプロジェクト」寄贈先の小学校を訪問	23
	ふくしまキッズ博に生協のキャラクターが集結	24
	放射性物質測定を子どもたちが体験	24
4.広域避難者への支援	埼玉県での避難所でサロンを毎週開催	26
	東京都内の避難者に心の交流の場を	26
	避難者家族のための「親子でスキーを楽しむ会」	27
	食のイベントに被災者6団体が参加	27
	広域避難者と支援者が共に今後の支援を考える	28
5.被災地から学ぶ	これまでの活動を振り返る「震災を考えるつどい」	29
	震災記憶を伝える「東日本大震災学習・資料室」	29
	被災地の視察に訪れ今後の取り組みを考える	30
	被災地との交流を通して防災やまちづくりに生かす	30
	福島の今を知りできることを考える	32
	支援の継続を決意!「震災支援交流会」	32

III 今後の支援を考える

インタビュー	日本福祉大学社会福祉学部・教授 村上徹也氏	34
メッセージ	被災地のいま	36
	応援メッセージ	38

復興の現状

東日本大震災から3年が過ぎた今、被災地の復興はどういった状況にあるのだろうか。復興庁の出している復興状況のデータを基に、2012年度時点の状況と比較してみる。



岩手県陸前高田市今泉地区での高台造成の様子。ここでは2016年5月から住宅の建築が可能となる見込み。

復興はいまだ道半ば 引き続きの支援が必要

東日本大震災から3年がたった今、がれきの撤去や交通網の復旧など、表面的にはかなり進んでいる部分がある一方、復興まちづくり計画がほとんど進んでいないなど、被災地復興の現状は、逆に見えにくくなってきている。各分野の復興状況について、復興庁の『復興の現状と取組』のデータで見てみる。

いまだ全国で避難を強いられている方は、2012年の32万1,433人から27万7,609人へと若干減少しているものの、いまだ多くの人々が避難している状況にある。しかも、その過半（約14万2,000人）を福島県の方々が占めており、東京電力福島第一原発事故災害の被害者救済など、復興への今後の課題は山積している。

災害廃棄物処理の進捗状況は、2012年は34%だったが、2013年は89%となっている。岩手県、宮城県では、災害廃棄物、津波堆積物ともに2013年度内での処理可能の見込みがたった。一方、遅れている福島県では、仮置場への搬入は2013年度内の完了を目指すとともに、2014年度のできるだけ早期の処理完了を目指すとしている。ようやく復興の

スタートラインが見えてきた状況にある。

農地については、2012年の34%から63%の復興となっている。引き続き、被災農地の営農再開に向けて、農地復旧や除塩が実施されている。一方、水産業における漁港の復興は2012年の35%から37%とほとんど進んでいない。

仮設住宅から出た人のための復興住宅（公営住宅）の工事完了は2013年度でもわずか1.9%（着工は60%）、家をつくるために土地に手を加える造成宅地についても、予定地についてはほぼ着工はしているが、完成は4%となっている。

このことが、仮設住宅の入居者が減っていない（2013年で10万3,958人が入居中）要因になっており、仮設住宅でのくらしはまだ長引く見通しとなっている。

全体的に言えば、災害廃棄物の処理や農業や水産業などの地域の産業の復興が徐々に進む中、大きな課題は、生活基盤である復興住宅や造成宅地の完成が遅れているということだ。被災者の生活再建はいまだ途上にあり、引き続きの支援が求められている。

復興の進行状況

2012

2013

被災3県における状況

避難者数

32万1,433人

27万7,609人

仮設住宅居住者

11万2,330人

10万3,958人

100% 50% 0% 0% 50% 100%

災害廃棄物(がれき)の処理

34%

89%

がれきの処理は大方完了し、
ようやく復興へのスタートラインに立てる状況になってきた。
(福島県の汚染廃棄物対策地域を除く。)

農地

34%

63%

「農業・農村の復興マスタープラン」に基づき、被災農地の営農再開に向けて、
農地復旧や除塩を実施中。被害のあった青森県から千葉県までの
6県の津波被災農地2万1,480haのうち6割が復旧。

漁港

35%

37%

被災した漁港数319漁港のうち、
陸揚げ岸壁の機能が全て回復した漁港数は118漁港。

復興住宅

データなし

1.9%

必要災害公営住宅の戸数2万1,421戸、整備に着手した戸数(用地確保完了時点)は
1万2,810戸。工事完了はわずか1.9%。全体計画未定の福島県分は含まれていない。

復興まちづくり(被災した造成宅地)

データなし

4%

対策工事が必要な地区数182地区のうち181地区に着工、7地区が完了している。

出典：復興庁『復興の現状と取組』(平成25年11月29日)より

I 震災発生、そして復興へ

2011年3月11日、東日本大震災発生。
以来、途切れることなく、被災地生協および
全国の生協は、被災地復興へ全力をあげてきた。
2011年、2012年の復興支援の足どりを紹介する。



津波の被害を受けた岩手県大船渡市の中心部。



組合員に「安心」を届けるため
共同購入を一斉再開 (11年4月)

いわて生協は、11年4月11日から配達を開始。
組合員は共同購入（宅配）の再開をとても喜んでくれた。

2011

震災直後、食料を供給し続けた生協

震災直後、被災地生協はすぐに対策本部を立ち上げ、被害状況の把握を行なった。しかし、沿岸部の店舗や宅配センターなどとは、長らく音信不通の状況に陥った。判断を仰ぐまで待つてはいられない。今何が必要なのか、現場では個々が判断し、行動した。

被災地生協は、店舗・宅配・移動

販売等で食料を供給し続けた。さらに、組合員の力を借りながら炊き出しなども実施した。避難所などへの必要な物資配送も行なった。そして全国の仲間がそれを支援した。

被災地域の人々の命と暮らしを守る。
生協の決意が具体的な支援となって広がっていった。



組合員・地域住民のために店を開け続ける (11年3月)

11年3月18日午前10時、店を取り巻くように行列ができた、みやぎ生協の国見ヶ丘店。



「届かない被災地」に物資を！
必要なものを必要な人へ (11年3月)

コープふくしま・相双支部では、孤立している福祉施設などの要望を聞き出し、必要物資を直接届けた。



引っ越し支援へ、全国の生協職員が集結 (11年5月)

岩手県災害ボランティアセンターからの要請を受け、岩手県生協連と日本生協連の呼び掛けで、2カ月半にわたり、201軒の引っ越し支援を行なった。



埼玉県・旧騎西高校での避難所応援隊 (11年7月)

さいたまコープ (現・コープみらい) では、職員やOB、組合員で結成する避難所応援隊を結成。定期的な支援活動を実施した。(避難所は14年3月に閉鎖予定)

緊急時対応から生活支援へ

次第に被災地は落ち着きを取り戻していく。被災地生協の店舗や宅配もその機能を復活させていった。

被災地の状況の変化に合わせ、支援内容は、緊急時対応から避難所での炊き出し、被災地の清掃ボランティア、仮設住宅への引っ越し手伝いなどへと重点が変わっていく。

生協の支援活動は、被災地だけではなく。被災地県外の避難所で暮らす人々への支援も始まった。

また、福島県では、放射性物質の汚染被害に対する取り組みも開始された。除染ボランティアや除染カーの導入、継続的な学習会の実施など、放射能との長い戦いが始まった。



○震災直後の被災地および各生協の取り組み内容

- 被災地生協は地震発生当日に対策本部を設置し、被災者への商品供給に努めた。また自治体や避難所に支援物資を届け、同時に生協の配送トラックを利用して自治体や避難所への配送に協力した。
- 全国の生協もいち早く支援活動を開始。2011年4月28日迄にトラック延べ1,190台、支援者延べ3,587人を派遣。食品や燃料を含む約71万点(トラック約370台分)の物資支援が行なわれた。
- 日本生協連は地震発生の翌朝、仙台市内に10トントラック4台の支援物資を届けた。以降、取引先や全国の生協の協力を得、11年4月6日までに食料品等1,170万点(10トントラック633台分)を送り出した。
- CO・OP 共済加入者への訪問活動等が全国の生協職員により行なわれた(11年5月24日迄に延べ2,736人)



放射性物質除染ボランティア (11年7月)

福島県内の各行政で始まった放射性物質の除染活動に、コープふくしまは、ボランティアの参加を広く呼び掛けた。



宮城県女川町で炊き出し支援 (11年10月)

パルシステムグループ（パルシステム連合会および同連合会の会員生協、関連会社）とあいコープみやぎが連携し、女川町での炊き出し支援を行なった。



宮城・福島で憩いの場作り (11年11月)

コープネット事業連合は、みやぎ生協と協力し、継続的に仮設住宅で「ふれあい喫茶」や「ふれあいひろば」を開催した。

被災地支援の全国での展開

事業を通じての継続的な支援を行なおうと、全国で、店舗や宅配での被災地支援キャンペーンも展開された。組合員活動でも、被災地への贈り物をつくったり、募金活動を展開したりと、自分たちのできる範囲でできるだけのことをやろう、との取り組みが広がっていく。

初動の緊急時には、流通業としての

インフラをフル稼働させての食料や物資提供に取り組み、徐々に避難者の生活の支援へ取り組みがシフトしてくると、今度は、組合員や職員のボランティアの出番が多くなっていく。

震災支援活動の1年目、生協の持つ多様な力が、被災地支援で大きく発揮されていった。



2011



店舗と宅配で被災産地を支援

ユーコープ事業連合の各会員生協の店舗では、毎月「震災地支援キャンペーン」を展開。商品のお買い上げ総額から1%相当を被災地へ寄付した。



大分で「ふくしまっ子応援プロジェクト」開催 (11年12月)

コープおおいたとコープふくしまの継続的な支援交流の一環で、11年12月25日から3泊4日の日程で福島県南相馬市の小学生30人が大分に招待された。



震災から1年、復興への思い新たに (12年3月)

12年3月11日、被災地3県の生協では、全店舗で復興祈念タオルが配布された。



福島のパロモーション活動を展開 (12年6月)

東海コープ事業連合は、コープあいち、コープぎふ、コープみえの組合員と共に福島を訪れ、組合員によるプロモーション活動を展開した。
(写真は生産者の思いに耳を傾ける産地訪問の参加者)

2012

継続する支援の取り組み



東日本大震災発災から1年がたった。しかし、被災地の復旧・復興は、まだまだの状況にある。

被災地生協および全国の生協は、協力・連携しながら、2012年も、被災地復興支援に取り組んだ。

生協の事業を通し、あるいは生産者と共に行なう支援の取り組み。また、

仮設住宅や県内外の避難先で暮らす方々へのサポートや、被災地の子どもたちを招く保養企画。そして福島の放射能との戦い…。

人と人が協同し、その力でより良い暮らしを目指す組織、生協。その原点に立ち返り、東日本大震災を「忘れない、風化させない」取り組みが数多く展開された。



地産地消フェスタに2万人が来場 (12年5月)

いわて生協は、12年5月19、20日にベルフ牧野林で「第3回復興支援いわて生協地産地消フェスタ」を開催、2万人が来場した。



男性も参加しやすい「夜のお茶っ会」開催 (12年6月)

12年6月30日、コープかながわ (現：ユーコープ) によって、岩手県陸前高田市の仮設住宅で「夜のお茶っ会」が開かれ、男性や働く女性も参加できた。



岩手県の子どもたちが石川県へ（12年7月）

コープいしかわは、12年7月28日、岩手県の子どもたちを石川県に招く保養企画を実施。子どもたちは夏のひとときを楽しんだ。



福島の生産者を訪問、「絆ボックス」で応援（12年9月）

12年9月15日、東北サンネット事業連合は、宅配事業で取引のある産直センターふくしまを訪問。直接生産者の話を聴いて、「絆ボックス」の企画に生かす。



2012

原発事故に負けない取り組み



東京電力福島第一原発の事故による放射性物質の風評に悩まされる福島県の生産者や、津波による壊滅的な被害を受けた被災地沿岸部の生産者は、震災から1年が経過しても、依然として厳しい状況が続く。

全国の生協や被災地生協は、継続支援を通して、生産者に寄り添いながら、

共に復興への歩みを進めた。産直提携先の生産者の復興支援や製品の店舗での供給、食のみやぎ復興ネットワークの多様なプロジェクトによる取り組み、あるいは組合員自身による被災地産品のプロモーション活動など、全国の生協の職員・組合員と、被災地の生産者との、商品を軸にした関係づくりが進められた。



被害の可視化で風評被害を乗り越える（12年9月）

12年9月24日、25日、福島県生協連本部にて「土壌スクリーニング・プロジェクト」が実施された。「放射性物質分布マップづくり」の推進で風評被害に対抗していく。



仮設住宅への支援、「へちま絆プロジェクト」（12年11月）

12年11月15日、みやぎ生協の組合員と仮設住宅の住人計7人がコープこうべを訪問。この間、継続的に進められているプロジェクトの報告と交流を行なった。（写真は、仮設住宅でコープこうべから贈られたへちまの種を植えている様子）



友として、被災地復興へ取り組む (12年11月)

コープあいちでは、組合員の被災地交流ツアーを何度も開催し、被災地の住民と顔の見える支援関係をしっかり築き上げてきている。



仮設住宅の新年の準備をお手伝い (12年12月)

いわて生協では、2011年よりバスボランティアを継続している。写真は12月に、仮設住宅の窓拭きと地域の憩いの場づくりを行なった時の様子。

被災地の心に寄り添う

復興までの道のりが長期化する様相を呈し、仮設住宅のくらしが長引き、先行きの見えない状況が続く。被災地では、住民の精神的なケアが大きなテーマとなってきた。コープこうべの仮設住宅へ「へちま」を贈るプロジェクトや、コープあいちの被災地への定期的な訪問など、被災地の心に寄り添う活動が全国の生

協で展開された。被災地から離れていても自分たちにできる支援は何か。繰り返しの問いかけがなされている。

事業の面でも店舗や宅配で復興支援の企画を立て、被災地産品の供給や対象商品の購入金額を一部寄付するなど、各生協で工夫を凝らした取り組みが行なわれた。



12年も開催! 京都の餅を宮城へ届ける (12年11月)

11年に引き続き、12年11月、京都生協は「復興支援餅つき大会」を行ない、京都でついた餅を、宮城県南三陸町と登米市で振る舞った。



被災地から遠い地で、何ができるか (12年12月)

日本生協連は12年12月12日、岡山市で「震災支援交流会～忘れない 3・11～」を開催。133人が参加し、遠くにおいてもできる支援について積極的に話し合った。

II 継続支援の誓い、2013年

東日本大震災から3年がたち、被災地への意識は次第に風化しつつある。

だからこそ、助け合いの組織である生協は、

被災地を「継続支援」していく意思を固めている。

2013年の生協の取り組みの一部を紹介していく。

1 | 被災地への支援

被災地では、いまだ復興のめどが立たない中で、被災地の人々への心の支援がより一層求められている。全国の生協では、被災地の方々への贈り物やボランティア活動、現地を訪れる交流など、さまざまな支援活動を継続して展開してきた。



立ち並ぶ仮設住宅。岩手県宮古市にて。

石巻の仮設住宅で 正月餅つき大会 コープネット事業連合

2013年1月7日、コープネット事業連合（以降、コープネット）では、宮城県東松島市の仮設住宅「グリーンタウンやもと第一」で、正月餅つき大会を開催した。この仮設住宅には、11年秋から、コープネットの組合員・職員延べ400人以上のボランティアが訪問している。

この日、JAいしのまき管内の農家から提供された餅米で、仮設住宅の皆さんと交代で元気よく餅をついた。JAいしのまきとコープネットは、「CO・OP特別栽培米宮城ササニシキ」を通じて取引があり、同じ「協同組合」として協力しながら被災地で支援を行なっている。

この日は、子どもたちも参加できるように、お好み焼きづくりも実施。和気あいあいとした雰囲気の中で交流しながら、お雑煮とお好み焼きを一緒に食べ、身も心も温まり、集会

場に集まった約80人の参加者からは笑顔があふれた。

被災地では、災害公営住宅などの建設が遅れ、仮設住宅での生活が長期化する見通しだ。そんな中、仮設住宅の住民の心のケアが重要な課題となっている。コープネットは、軽食やお茶菓子を食べながら、気軽におしゃべりできる「ふれあい喫茶」を定期的に開催。楽しみや交流できる場を提供することで、仮設住宅の方の心を気遣った支援をしている。

福島県川内村への 移動店舗を開始 コープふくしま

福島県双葉郡川内村は、東京電力福島第一原発事故により、警戒区域と緊急時避難準備区域に指定されていた。しかし、除染によって生活が可能と村が判断し、2012年1月31日に「帰村宣言」が出された。

けれども、放射性物質への抵抗感や、買い物施設などの住環境が整っていないため、12年11月時点で、帰村し生活を再開



コープふくしまの移動店舗。



初回運行時には、川内村の方々にコープ商品について知ってもらうため、コープふくしま野中俊吉専務理事らが試食の提供を実施。

したのは、住民3,000人のうち約4割にとどまった。

コープふくしまは12年10月から同村での共同購入（宅配）の運用を続けている。しかし店舗がないため、住民の方は実際に食品を手にとり選んで購入できないのが現状だ。そこでコープふくしまは、さらなるお役立ちのため、13年4月14日から10月まで、毎週日曜日に、移動店舗の運行を実施した（車両は、平日に福島市、二本松市、国見町で使用されているものを使用。同車はならコープより寄贈された）。また、運行にあたっては、日本生協連職員が毎回2人体制で、コープふくしまの職員を補助するボランティアに入った。

販売先では、「店舗が遠く、今まではアイスや冷凍食品が買えなかったのでうれしい」「山道を通って買い出しに行っていたが、子どもが車酔いをして困っていたのでありがたい」といった声が聞かれた。

仮設住宅の方の手芸品の 販売ルートを作り出す いわて生協、みやぎ生協

岩手県宮古市の高台にある 弘川仮設

住宅では、毎日、午前9時過ぎから午後3時ごろまで、仮設住宅の談話室で「いきいき教室」を実施。この活動は11年10月にスタートし、6人のメンバーでお手玉やひざ掛け、バッグ、鍋カバー、帽子などの手芸品を丁寧に作っている。

13年3月12日は、縫い針などを刺しておく針山やティッシュボックスケースなどを制作。「みんな震災前は針仕事なんかしたことないのよ」とメンバーの一人は笑うが、かきの養殖の仕事で培われた器用な指先からは、次々と立派な作品が出来上

がっていく。

材料費やお菓子、お茶などの購入には、いわて生協の「グループ活動費用補助」を活用している。これは被災地や内陸に避難した方が5人以上集まって行なうサークル活動やお茶会などを対象に、1回3,000円（1カ月最大4回まで）を上限にいわて生協が補助しているものだ。

この先の住居のことや仕事のことなど、考え始めれば不安や心配は止めどなくあふれてくる。しかし、「ここはいつもにぎやかで、笑いがあふれ、最高の場所なんです」とメンバーの一人が話すように、日々語らい、手芸などに打ち込める場所があることは、被災した方にとって大きな心の励みとなっている。

ここで制作したものは、いわて生協・マリコープDORA（宮古市）で販売されている。仮設住宅の人々にとって、多少なりとも収入が入るのはうれしいこと。何よりも、制作した商品を通して、社会とつながりを感じられることが、生きがいにもつながっている。

みやぎ生協では、仮設住宅集会所などで、住民のコミュニティーづくりや孤立化防止に取り組んできた。その活動のひとつに、「手作り商品カタログ」の作成がある。これは、震災で仕事や販売先を



弘川仮設住宅の「いきいき教室」の皆さん。



みやぎ生協の
「新“復興応援”手作り商品カタログ」Vol.1。

失った福祉共同作業施設などの手作り商品の販売ルートをつくり、支援する試みだ。

12年11月に第1弾、13年3月に第2弾、そして13年7月に第3弾となる「“復興応援”手作り商品カタログ」Vol.3を発行した。また、14年1月には、「新“復興応援”手作り商品カタログVol.1」を宮城県石巻市のNPO法人「応援のしっぽ」と協力して発行。最新カタログには、これまで発行した「手作り商品カタログ」Vol.1～3掲載団体を中心に、新たな団体を加えた28団体の商品を掲載している。

この間、このカタログを活用しながら、メ

ンバー（組合員）による店舗での企画販売や、文化会館ウィズでの販売、他生協でのイベント、各団体の直接販売分など、290万円を超える売り上げへとつながった。

「お好み焼き隊」が 生協の心・味・歌を お届け 生協ひろしま

生協ひろしまでは、被災地の皆さんに少しでも元気になってもらおうと、2013年秋も継続して「お好み焼き隊」を岩手県・宮城県・福島県に派遣。また今回は「生協ひろしま虹のコーラス」（組合員コーラスグループ）も同行し、歌の交流を実施した。

また、広島調味料メーカー大手・オタフクソース株式会社は、昨年に引き続いて「お好み焼き隊」の趣旨に賛同し、鉄板の貸し出し、ソースや生地、削り粉、青海苔や天かすの提供のほか、焼き方のレクチャーもしてくれた。キャベツ、もやし、豚肉、卵など、その他の材料は被災地生協の店舗で購入した。



お好み焼きを囲んで皆さんの笑顔と会話が広がり、一緒に歌を歌って交流を深めることができた。

公募で参加した生協ひろしまの組合員の一人は、広島県安芸郡熊野町でお好み焼き屋を営む方。「日本一おいしいお好み焼きを作る自信はありませんが、世界一心のこもったお好み焼きを作る自信はあります」と今回のツアーに応募した。プロの腕前と、心がこもったお好み焼きは本当においしいと、仮設住宅に笑顔が広がった。

全日程で焼かれたお好み焼きは477枚、半分に切って提供されたので、約1,000食を被災した地域の方々が楽しんだ。

被災地に継続して ボランティアバスを運行 全国の生協

ならコープ、おおさかパルコープ、大阪よどがわ市民生協では、前年度に引き続き、13年4月から14年3月まで、ボランティアバスを計画。津波によって街が壊滅的な被害を受けた岩手県陸前高田市上長部地区で、主に支援活動を展開した。「語り部」の方から現地の実情を聞いたり、仮設住宅の現状を聞いたりしながら、今後の復興支援のあり方を考えつつ支援を行なっている。

いわて生協では、「被災地でボランティアをしたいが、個人ではなかなか参加できない」との声に応え、11年6月より、



生協ひろしまは、約1,000食の世界一心のこもったお好み焼きを提供した。



バスボランティア100回記念植樹式の参加者。四季の移ろいを感じさせてくれる、マンサク、クロモジ、ムシカリ、ウリハダカエデの4種10本が植えられた。



13年3月27日、ならコープ、おおさかパルコープ、大阪よどがわ市民生協のボランティアバスでは、震災経験を伝える「くぎこ屋」を訪れ、避難所の運営などについてのお話を聞いた。

内陸の市町村から沿岸部の被災地域に向けてバスボランティアを実施してきた。13年7月13日で100回目を迎え、この日は、いわて生協の60人に加え、合同でバスボランティアを開催してきた、ならコープ、おおさかパルコープ、大阪よどがわ市民生協の組合員など30人、それにコープいしかわの組合員など10人が参加して、陸前高田市米崎町・再生の里ヤルキタウンで記念植樹式が行なわれた。

いわて生協・組織本部・復興支援担

当の小野寺 真さんは「今後も継続的にこの地を訪れるボランティアの皆さんに見守っていただきたい。そしてこの木の成長自体が陸前高田市の復興のシンボルになればと思います」と話す。

土壌スクリーニング・プロジェクトに新コース 福島県生協連・全国の生協

福島県生協連は、JA新ふくしまや福島大学と共に、12年10月8日から、農地

一枚ごとの放射性物質濃度を測定し、その結果を今後の生産計画に生かすための「土壌スクリーニング・プロジェクト」を行なっている。このプロジェクトの速度を上げるため、全国の生協にボランティアが呼び掛けられており、生協職員の多くが参加している。ただし、これまではレクチャーと実測を含め4日連続の参加が必須だったため、「より参加しやすいボランティアのコースをつくってほしい」との声が多数上がっていた。

そこで13年5月より、2日間の「ショート・コース」「リピーター・コース」を新設。ショート・コースに参加した、東京都生協連の荒井伸幸さんは「ショート・コースにも、福島県の農地の実態や課題を学べるレクチャーがあり、大変勉強になりました」と話す。

13年5月27日には、このプロジェクトを含めた福島県生協連の取り組みに、消費者支援功労者表彰の「内閣総理大臣表彰」が贈られた。



「土壌スクリーニング・プロジェクト」の様子。

関連資料

※以下の資料は、こちらのサイトで。 [日生協 復興支援資料集](#) [検索](#) (URL://shinsai.jccu.coop/tsunagaru)

■『CO・OP navi』

◎資料番号3-2-1-201

生協のサービスを通じた復興のお役立ち(みやぎ生協)

『CO・OPnavi』2013年1月・P24

■『生協運営資料』

◎資料番号3-2-1-301

継続した被災地支援体制の構築(いわて生協)

『運営資料』2013年3月・P6

■『つながろうCO・OPアクション情報』

◎資料番号3-2-1-401

宅配水・車検・葬祭・保険の事業でも復興支援(みやぎ生協)

『つながろうCO・OPアクション情報』第25号

◎資料番号3-2-1-402

岩手県、各所で年末のお振る舞い(岩手県生協連、いわて生協)

『つながろうCO・OPアクション情報』第25号

◎資料番号3-2-1-403

ふるさと絆情報ステーションの取り組み(コープあいづ)

『つながろうCO・OPアクション情報』第25号

◎資料番号3-2-1-404

帰村宣言「川内村」への共同購入展開(コープふくしま)

『つながろうCO・OPアクション情報』第26号

◎資料番号3-2-1-405

白河市で保養プロジェクト実施(福島県南生協)

『つながろうCO・OPアクション情報』第26号

◎資料番号3-2-1-406

福島県民に寄り添い、茨城県でできることを見つけたい

(茨城県生協連)

『つながろうCO・OPアクション情報』第26号

◎資料番号3-2-1-407

「リフレッシュツアー」開催(いわて生協)

『つながろうCO・OPアクション情報』第26号

◎資料番号3-2-1-408

「土壌スクリーニング・プロジェクト」が雪で大幅な作業遅れ

(福島県生協連)

『つながろうCO・OPアクション情報』第26号

◎資料番号3-2-1-409

「グループ活動費用補助」を利用した活動(いわて生協)

『つながろうCO・OPアクション情報』第27号

◎資料番号3-2-1-410

「地域をつなぐ交流会」開催(コープあいち)

『つながろうCO・OPアクション情報』第27号

◎資料番号3-2-1-411

18生協へ厚生労働省より感謝状

『つながろうCO・OPアクション情報』第27号

◎資料番号3-2-1-412

コープふくしま主催の「交流の場」に、さいたまコープも協力

(コープふくしま、コープみらい)

『つながろうCO・OPアクション情報』第28号

◎資料番号3-2-1-413

使用できなかった下水道料金を還付へ(みやぎ生協)

『つながろうCO・OPアクション情報』第28号

◎資料番号3-2-1-414

組合員が振り付けで応援(コープあいち)

『つながろうCO・OPアクション情報』第28号

◎資料番号3-2-1-415

全国で復興支援ツール活用(全国の生協)

『つながろうCO・OPアクション情報』第29号

◎資料番号3-2-1-416

リサーチ「被災地のいま」 住宅事情

『つながろうCO・OPアクション情報』第29号

◎資料番号3-2-1-417

カードと福祉作業所のお菓子をお届け(いわて生協)

『つながろうCO・OPアクション情報』第30号

◎資料番号3-2-1-418

帰村宣言の川内村で、移動店舗運行開始(コープふくしま)

『つながろうCO・OPアクション情報』第31号

◎資料番号3-2-1-419

「土壌スクリーニング・プロジェクト」ボランティアに新コース

(福島県生協連)

『つながろうCO・OPアクション情報』第32号

◎資料番号3-2-1-420

継続した復興支援活動を全国の生協で確認

(全国の生協、日本生協連)

『つながろうCO・OPアクション情報』第32号

◎資料番号3-2-1-421

バスボランティア100回記念「植樹式」を実施(いわて生協)

『つながろうCO・OPアクション情報』第33号

◎資料番号3-2-1-422

「ピースアクションinヒロシマ」で復興支援活動について報告

(被災地生協)

『つながろうCO・OPアクション情報』第34号

◎資料番号3-2-1-423

被災された方に代わって東北復興祈念巡礼を(四国4生協)

『つながろうCO・OPアクション情報』第34号

◎資料番号3-2-1-424

震災直後の支援に感謝を込め、海産物を提供

((株)シーエックスカーゴ)

『つながろうCO・OPアクション情報』第36号

◎資料番号3-2-1-425

リサーチ「被災地のいま」 生協の募金

『つながろうCO・OPアクション情報』第36号

■復興支援ポータルサイト

◎資料番号3-2-1-501

手づくりのひざかけ等をお送りしました(コープやまぐち)

<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/01/post-99.html>

◎資料番号3-2-1-502

冬の運動不足解消に「玄米ダンベル」を役立てて(コープこうべ)

<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/01/post-100.html>

◎資料番号3-2-1-503

避難所での炊き出し・子育て支援を続けています(さいたまコープ)

<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/01/post-101.html>

◎資料番号3-2-1-504

生産者交流会で、福島の報告会・クリスマスカフェを開催しました。

(コープおいた)

<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/01/post-103.html>

◎資料番号3-2-1-505

被災地に「あったか肌着」を贈呈しました(おかやまコープ)

<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/01/ni.html>

◎資料番号3-2-1-506

「絵手紙づくり講習会」を開催しました(ちばコープ)

<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/02/post-104.html>

◎資料番号3-2-1-507

石巻で正月もちつき大会を開催しました(コープネット事業連合)
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/02/post-105.html>

◎資料番号3-2-1-508

被災地で生まれた歌に 想いをのせて(コープあいち)
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/02/post-106.html>

◎資料番号3-2-1-509

岩手県の被災者の方に、手編みの品をお贈りしました
(いばらきコープ)
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/02/post-108.htm>

◎資料番号3-2-1-510

手づくりの「ひなまつりカード」をお贈りしました(コープとうきょう)
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/03/post-109.html>

◎資料番号3-2-1-511

避難されている方々といっしょに「玄米カイロ」を作りました
(さいたまコープ)
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/03/post-111.html>

◎資料番号3-2-1-512

被災地で2年間活躍したワゴンが帰ってきました
(パルシステム東京)
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/04/post-134.html>

◎資料番号3-2-1-513

コープふくしま主催の「交流の場」に、さいたまコープも協力
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/04/post-135.html>

◎資料番号3-2-1-514

3回目の「たこ焼き交流ボランティアバス」企画を実施
(大阪いずみ市民生協)
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/04/post-138.html>

◎資料番号3-2-1-515

三陸唯一の映画館「シネマリーン」へ募金のご協力を
(みやこ映画生協)
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/05/post-143.html>

◎資料番号3-2-1-516

手芸品と語らいと笑いが生まれる「いきいき教室」(いわて生協)
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/05/post-144.html>

◎資料番号3-2-1-517

川内村への移動店舗を開始(コープふくしま)
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/05/post-141.html>

◎資料番号3-2-1-518

「ボランティアバス参加者のつどい」
(おおさかパルコープ、大阪よどがわ市民生協、ならコープ)
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/05/post-145.html>

◎資料番号3-2-1-519

コープおおいたの福島訪問(コープおおいた)
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/06/post-149.html>

◎資料番号3-2-1-520

「復興支援商品の作り手」と交流～ならコープ
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/07/post-151.html>

◎資料番号3-2-1-521

ボランティアバス支援地を組合員理事が訪問～ならコープ
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/07/post-152.html>

◎資料番号3-2-1-522

南三陸町への復興支援「弾丸バスツアー」を開催～京都生協
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/07/post-155.html>

◎資料番号3-2-1-523

2013年度第1回震災ボランティアバスを開催～福井県民生協
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/07/2013.html>

◎資料番号3-2-1-524

「七夕まつり」支援バスボランティアを開催～コープあいち
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/09/post-166.html>

◎資料番号3-2-1-525

「復興支援 地産地消フェスタ」を開催しました～いわて生協
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/09/post-168.html>

◎資料番号3-2-1-526

被災地支援バス・学生ツアーを実施しました～大阪府生協連
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/10/post-170.html>

◎資料番号3-2-1-527

【特別報告】台風18号の被災地で支援活動～京都生協
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/10/18-1.html>

◎資料番号3-2-1-528

「映画の灯」を守ることができました～みやこ映画生協
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/11/post-175.html>

◎資料番号3-2-1-529

手芸品作りで避難者が交流～パルシステム福島
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/11/post-177.html>

◎資料番号3-2-1-530

「感謝祭」で、被災地の食材を提供～(株)シーエックスカーゴ
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/11/post-179.html>

2 | 生産者と共に復興を目指す

産直などを通して、生産者とのつながりがある生協では、震災直後からさまざまな形で生産者への支援を展開してきた。現在も、被災地を訪れ作業を手伝いながら交流したり、自分たちが暮らす地域で被災地の商品を買って支える取り組みをしたりと、生産者へエールを送り続けている。



大阪いずみ市民生協の志津川支所でのメカブ削ぎ作業の様子。



京都生協では土のうづくりをし、生産者とのバーベキュー交流を行なった。



かき養殖のいかだの固定に使う土のうがずらりと並ぶ。

ペースで、岩手・宮城・福島にボランティアバスを派遣していく予定だ。

13年6月28～30日まで、京都生協では、宮城県南三陸町への「弾丸バスツアー（バスボランティア）」を開催し、総勢37人が参加した（内訳は、京都生協職員とその家族24人、理事2人、大谷大学と近畿大学の学生9人、鳥取県畜産農協職員2人）。南三陸町での支援活動は今回で9回目、延べ229人が参加している。

6月28日夜8時半に京都を出発し、29日朝、現地に到着。直後から、かき養殖のいかだの固定に使う土のうづくりや、支援バーベキューなど、一日中さまざまな活動を行ない、その日の夜に南三陸町を出発。30日朝9時半に京都に帰着する強行日程だ。それでも、参加者たちはみんな元気いっぱい、充実した表情をしていた。

福島の漁業復興を目指し 取り組み状況を発表 コープふくしま

放射線汚染による水産業の影響から、福島での漁業復興はめどが立たず、先行

宮城県・志津川支所の 生産者を継続支援 大阪いずみ市民生協・京都生協

大阪いずみ市民生協は、震災後、2011年ボランティアバスを皮切りに、被災地へ度々足を運んできた。その中で、生



より大阪らしい企画をと「タコ焼き交流」を実施。和気あいあいとした雰囲気の中で生産者と一緒にの時を過ごした。

産者のもとで炊き出しや土のうづくりなどのボランティアを継続して行なってきた。

13年5月17、18日は、組合員19人と職員2人がボランティアバスで宮城県へ向かい、18日に南三陸町志津川を訪れた。^{そではま}袖浜地区では、志津川支所のメカブ削ぎ作業の手伝いをした。

また、がれき撤去やワカメの芯取り作業などを通して支援してきた志津川支所の生産者を、13年3月に大阪に招き交流会を開催している。交流会には、生産者、組合員、大学教授などが参加し、これまで20回にわたって行なわれたボランティア参加の経験が語られ、被災地支援に対するさまざまな意見交流が行なわれた。大阪いずみ市民生協では、今後も年6回ほどの



コープふくしまのコープマート方木田で、消費者に直接、漁業復興の取り組みについての説明会が実施された。



コープマート方木田の店頭で、原釜漁港で水揚げされた魚介類が並ぶ。

アピールした。

またこの日、福島県相馬市にある原釜漁港で水揚げされたミズダコ、キチジ、ズワイガニなど、放射線汚染の心配のない魚介類を、コープふくしまの店頭で供給した。少しずつ復興へ向かって動き始めた福島の水産業を、コープふくしまでは、供給面とイベントで全面的にバックアップしている。

きの見えない状態が長く続いていた。

そんな中、2013年3月9日に、漁業復興の取り組みについての説明会が福島県によって開催された。その会場となったのは、コープふくしまのコープマート方木田。漁業復興の取り組みを、店頭で直接消費者に説明するのは、県として初めての試みだった。

福島県農林水産部参事兼農産物流課長の吉田 肇さんは「福島県では、放射線に関する世界一厳しい検査体制を敷き、その結果をホームページで公開しています。全国の皆さんに、福島の取り組みを知って、信頼していただきたい」と

長野県栄村の復興を願い 「福幸そば」販売 全国の生協

生協では、東北3県以外の被災地の生産者への支援活動も行なっている。

11年3月12日に起きた長野県北部地震（通称名）では、長野県栄村は震度6強を記録し、大きな被害に見舞われた。被災した栄村の復興支援につなげるため、長野県生協連の上田 均会長理事（コープながのの理事長）と長野県に加藤さゆり副知事の懇談によって企画されたのが「福幸そば」だ。



震災を機に、栄村の新たな名物となった生麺「福幸そば（生）」。



地震の被害を受けた田んぼ。ここにそばを植えて、「福幸そば」が誕生した。（写真提供：（財）栄村振興公社）

栄村の地震の影響により米の作付けや耕作ができなくなった水田の一部を、復旧するまでの間そば畑に転用した。そのそばを商品化し、「福幸そば（乾麺）」「福幸そば（カップ麺・ミニ）」が発売され、コープネット事業連合の会員生協などで取り扱われた。さらに13年、長野県生協連は、新たに栄村のそば粉を使用した生麺「福幸そば（生）」を開発し1都22県の生協にて供給され、好評を博した。

全国の生協では、被災地の生産者の商品を広く組合員に知らせて、買い支える取り組みを積極的に進めている。

福島県産品4品目を供給し 福島県の農業を支える 東海コープ・コープふくしま

東海コープ事業連合でも、2012年、度重なる現地の生産者の訪問を経て、福島県産の桃の取り扱いをスタートしている。

13年4月11、12日に行なわれた「福島県産地視察学習」では、東海コープ事業



コープふくしま・コープmart保原の「東海フェア」ディスプレイ。

連合の会員生協（コープあいち、コープぎふ、コープみえ）の職員が福島県を訪れて、現地生産者や農協関係者の声を聞き、商品販売に生かすために桃の栽培の歴史や除染作業についての説明を受けた。

また、参加者は、コープふくしまの店舗で展開されている「東海フェア」（東海地方の青果を販売）の様子を見学。フェアは今回で8回目、以前から行なわれているコープおおいの「大分フェア」と交互で

開催。生協のつながりから、さまざまな産地との交流も行なわれている。

さらに、13年度は、東海コープ事業連合では桃に加え、ぶどう・りんご・米も供給。それぞれの品目に関する勉強会や視察も実施された。米は田植え期や稲刈り時期に、桃・ぶどう・りんごは6月に、職員・組合員による生産現場の視察・確認や組合員の産地訪問が行われ、視察結果などを小まめに広報し、利用を広めていった。

2012年度「買って支える」 取り組み調査結果 全国の生協

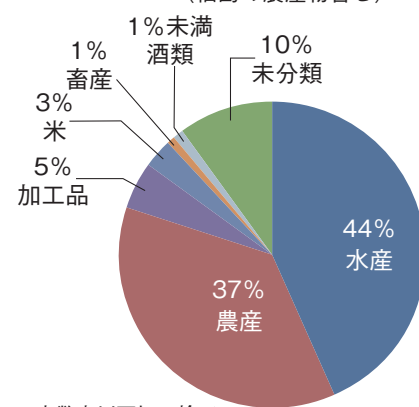
日本生協連・会員支援本部産直グループ（現・商品政策室産直グループ）は、2013年4月より、岩手県・宮城県・福島県を中心とする被災した地域の産品を「買って支える」取り組みについて調査を行ない、41生協から回答があった。調査結果によると、12年度、「買って支える」取り組みとして報告があった商品の金額は44億円に上る。



果樹園を見学する「福島県産地視察学習」の参加者。

「買って支える」取り組み

被災地域の産品取り扱い商品分類グラフ
（福島県の農産物含む）



※小数点以下切り捨て

全国の生協によって、被災した地域の産品を「買って支える」取り組みが積極的に行なわれた。総額は44億円。

商品の分類で見ると、水産が全体の44%と最も多く、知名度の高い「三陸産」のワカメなどといった海産物が、東日本の生協を中心に取引されていた。

次いで37%を占める農産では、福島県産の桃やキュウリ、トマトなど、風評被害に苦しむ生産者を支援しようという取り組みが数多く見られた。加工品は、仙台味噌・かもめの玉子・牛タンカレーなどの各地域の名産物の他、いわて生協マリンコープDORAの店長が代表を務める宮古復興プロジェクト「かけあしの会」の商品も挙げられた。

宮城県を中心とした農産品を扱う「絆フェア」の実施が3年目を迎えるコープこうべの担当者は、「回を重ねるごとに被災地域の商品の認知度が高まっています。放射能検査や事務作業の負担はありますが、継続することの重要性を感じています。過去2年間は多品目の商品提案でしたが、今年は産地・商品・生産者にスポットを当てた取り組みも予定しています。継続と新しい取り組みで、被災地の産品利用の幅を広げます」とコメントした。

復興の年越しそばで新年を 「わたりのそばプロジェクト」 食のみやぎ復興ネットワーク※

宮城県の^{わたり}亘理町は津波で農地の約8割が被災した。除塩作業を終えて耕作できるようになったところもあるが、農地に水を運ぶパイプラインや排水機能が復旧していないため、稲作に取り掛かれない土地がまだ多く残っている。そこで13年春、昔から米の転作作物として栽培してきたそばを、被災した農地で育てる「わたりのそばプロジェクト」がスタートした。

これは食のみやぎ復興ネットワークによるもので、栽培から、加工、流通までの一連の流れに、消費者も関わることができ、それも商品の特徴となる。



亘理町荒浜地区で開催された「そばの花見会」の様子。

13年10月4日、そば畑のある亘理町荒浜地区で「そばの花見会」が開かれ、近くの仮設住宅に住む方々やみやぎ生協のメンバー（組合員）など約120人が、そば畑の散歩と手打ちそばの昼食を楽しんだ。

みやぎ生協メンバーの^{やんべ}山家裕美さんは「震災にも台風にも負けず作物を育てていこうとする生産者の熱意が素晴らしい」と語った。

台風に襲われ全滅した畑もあるが、荒浜地区の一部と逢隈地区・山下地区のそばは順調に生育している。収穫したそばは年越し用に「復興亘理そば」として販売された。今後も生協のメンバーや食のみやぎ復興ネットワーク参加団体からアイデアを募って商品化が進められていく。



「復興亘理そば」として
みやぎ生協で販売された。

※みやぎ生協および宮城県内の農業・漁業関係者や食品関連産業者が、互いに励まし合いながら地域復興を目指すことを目的として、2011年7月2日に結成された。2014年2月、取り組みが評価され、第43回日本農業賞「食の架け橋の部」奨励賞を受賞した。

関連資料

※以下の資料は、こちらのサイトで。

日生協 復興支援資料集

検索

(URL: //shinsai.jccu.coop/tsunagaru)

『CO・OP navi』

◎資料番号3-2-2-201

被災地で作られた商品を、全国で利用し、復興を応援する(全国の生協)
『CO・OPnavi』2013年2月・P24

『生協運営資料』

◎資料番号3-2-2-301

食のみやぎ復興ネットワークが地域に果たした役割と今後の課題
(みやぎ生協)
『運営資料』2013年3月・P21

『つながろうCO・OPアクション情報』

◎資料番号3-2-2-401

めぐみ野「角田丸森産牛乳」生産者の取り組み(みやぎ生協)
『つながろうCO・OPアクション情報』第25号

◎資料番号3-2-2-402

「かけあしの会」にマフラー贈呈(いばらきコープ)
『つながろうCO・OPアクション情報』第26号

◎資料番号3-2-2-403

めぐみ野イチゴ生産者へ作業用ブレハブを贈呈 全国からの募金を利用
(みやぎ生協)
『つながろうCO・OPアクション情報』第26号

◎資料番号3-2-2-404

なたねプロジェクトおひろめ試食会(食のみやぎ復興ネットワーク)
『つながろうCO・OPアクション情報』第26号

◎資料番号3-2-2-405

64 団体が参加ふるまい企画(食のみやぎ復興ネットワーク)
『つながろうCO・OPアクション情報』第27号

◎資料番号3-2-2-406

コープマート方木本店で、復興の取り組み状況の説明(コープふくしま)
『つながろうCO・OPアクション情報』第27号

◎資料番号3-2-2-407

赤武酒造(株)からのメッセージ
『つながろうCO・OPアクション情報』第27号

◎資料番号3-2-2-408

栄村の復興を願い「福幸そば」販売(長野県生協連)
『つながろうCO・OPアクション情報』第27号

◎資料番号3-2-2-409

リサーチ「被災地のいま」 漁業
『つながろうCO・OPアクション情報』第30号

◎資料番号3-2-2-410

福島県産品四品目の取り扱いを予定(東海コープ事業連合)
『つながろうCO・OPアクション情報』第31号

◎資料番号3-2-2-411

なたねプロジェクト2期目の活動始まる(食のみやぎ復興ネットワーク)
『つながろうCO・OPアクション情報』第31号

◎資料番号3-2-2-412

リサーチ「被災地のいま」 農業
『つながろうCO・OPアクション情報』第31号

◎資料番号3-2-2-413

みやぎ生協組合員や宮城県漁協と交流(大阪いすみ市民生協)
『つながろうCO・OPアクション情報』第32号

◎資料番号3-2-2-414

リサーチ「被災地のいま」 生産現場～岩手県沿岸部
『つながろうCO・OPアクション情報』第32号

◎資料番号3-2-2-415

リサーチ「被災地のいま」 生産現場～宮城県石巻市
『つながろうCO・OPアクション情報』第33号

◎資料番号3-2-2-416

リサーチ「被災地のいま」 生産現場～福島県
『つながろうCO・OPアクション情報』第34号

◎資料番号3-2-2-417

2012年度「買って支える」取り組み調査結果が出ました
(全国の生協、日本生協連)
『つながろうCO・OPアクション情報』第35号

◎資料番号3-2-2-418

福島県産米の提供に向け組合員が産地を訪問
(東海コープ事業連合)
『つながろうCO・OPアクション情報』第36号

復興支援ポータルサイト

◎資料番号3-2-2-501

田老町のわかめ加工作業をお手伝い～安倍首相が視察に(日本生協連)
http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/04/post-136.html

◎資料番号3-2-2-502

「復興支援商品の作り手」と交流～ならコープ
http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/07/post-151.html

◎資料番号3-2-2-503

南三陸町で「メカブ削ぎ」をお手伝い～大阪いすみ市民生協
http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/07/post-153.html

◎資料番号3-2-2-504

被災生産者・メーカー復興レポート①～赤武酒造(岩手県大槌町)
http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/07/post-156.html

◎資料番号3-2-2-505

被災生産者・メーカー復興レポート②～田老町漁協(岩手県宮古市)
http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/08/post-157.html

◎資料番号3-2-2-506

被災生産者・メーカー復興レポート③～古須賀商店(岩手県宮古市)
http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/08/post-159.html

◎資料番号3-2-2-507

被災生産者・メーカー復興レポート④～番外編・宮古市産業振興部
http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/08/post-160.html

◎資料番号3-2-2-508

復興支援イベントの開催に協力～コープみらい(埼玉県本部)
http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/08/post-162.html

◎資料番号3-2-2-509

今年も「福島の桃」がおいしく実りました!～産直生産者の声
http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/09/post-165.html

◎資料番号3-2-2-510

「手作り商品カタログVol.3」が出来ました～みやぎ生協
http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/09/vol3.html

◎資料番号3-2-2-511

被災地メーカーと交流&試食会を開催～コープかごしま
http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/10/post-169.html

◎資料番号3-2-2-512

今年も「仙台白菜」の定植を行いました～食のみやぎ復興ネットワーク
http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/10/post-171.html

◎資料番号3-2-2-513

「お好み焼き隊」が生協の心・味・歌をお届け～生協ひろしま
http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/10/post-173.html

◎資料番号3-2-2-514

「綿」がつながる交流会を開催～あいコープふくしま&常総生協
http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/10/post-174.html

◎資料番号3-2-2-515

「そばの花見会」を開催しました～食のみやぎ復興ネットワーク
http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/11/post-176.html

◎資料番号3-2-2-516

「コープみらいフェスタ2013」に、被災3県の生協が出展
http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/11/20133.html

◎資料番号3-2-2-517

稲刈り体験 動画(東海コープ)
http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/11/coop36.html

3 | 子どもたちの未来のために

東日本大震災および東京電力福島第一原発事故は、被災地の子どもたちにも、大きな影響を及ぼした。自由に外遊びができない子どもたちのための保養プロジェクトをはじめとして、生協では未来を担う子どもたちへ、継続的に支援を実施している。



ウェルカムパーティーで楽しむ参加者たち。〔「福島の子どもの保養プロジェクトin 神奈川」〕

福島の子どものための 保養プロジェクト 全国の生協・日本生協連

福島県生協連では、福島大学災害復興研究所および福島連携復興センターと共催し、また、日本生協連をはじめとする全国の生協と日本ユニセフ協会の支援を受けながら、「福島の子どもの保養プロジェクト（コヨット!）」を立ち上げた。この取り組みは、週末保養企画を中心に、子どもの被ばく積算量を心配する保護者の気持ちに寄り添った、子どもと保護者がまっとできる時間づくりを目的としている。

13年夏の長期休暇には、「コヨット!」の趣旨に賛同した生協による特別保養企画が全国に展開、北は北海道から南は

愛媛県まで、17の企画が開催された。さらに、13年秋・冬には、コープあいつ、茨城県生協連、いばらきコープ、パルシステ



神奈川県秦野市内の農園でいちご狩りを楽しむ子どもたち。〔「福島の子どもの保養プロジェクトin 神奈川」〕

ム茨城、コープしずおか、パルシステム連合会、コープぎふ、岡山県生協連の10生協・生協連が福島の子どもたちを受け入れ、保養企画を実施している。

福島の子どもの保養プロジェクトは、13年12月31日現在、週末企画70回2,478人、県外受け入れ企画22回633人、外遊び企画118回5,247人、合計210回8,358人の参加となっている。12年12月の開始から累計で2万2,089人の参加者数となった。

「コヨット!」の他にも、各生協では、福島の子どもたちのための独自の企画も展開している。

13年3月25～29日には、神奈川県で「福島の子どもの保養プロジェクトin 神奈川」が行なわれた。12年春休み企画・夏休み企画に続いて3回目となる。神奈川県ユニセフ協会・神奈川県生協連、東北の支援活動を行なっている「守りたい・子ども未来プロジェクト」でつくる実行委員会が主催したもので、これまでと同様に、ユーコープやパルシステム神奈川ゆめコープ、富士フイルム生協、うらがCO・OP、ナチュラルコープ・ヨコハマなど神奈川県内の各生協や、秦野市および近隣の企業やNPOも協力し、子どもたちの5日間にわたる滞在を支援した。

復興を担う次世代を支援 「海の虹プロジェクト」 京都生協

京都生協は、宮城県南三陸町への復興支援活動を継続的に行なってきた。そのつながりから13年8月16～20日、南三陸町の復興を将来担う中学生たちを京都に招き、地域の人たちと交流する「海の虹プロジェクト」を開催し、57人が参加した。

8月18日、南三陸町の子どもたちは京都府北部の綾部市陸寄町古屋集落を訪ね



京都の限界集落で、鹿よけのネット張りをする南三陸町の子どもたち。



トラックの荷台に乗って、京都の山道を進む。

た。ここは高齢者ばかり6人が住む限界集落で、その重要な収入源となっているトチの木を獣害から守るためのネット張り作業に参加した。

プロジェクトの代表を務める京都生協・地産地消推進担当の福永晋介さんは「古屋集落の生活環境の厳しさは、被災地と根本的には同じだと思います。被災地の子どもたちが、このような地域と交流することで、普段は支援される側でも、支援する側に回る力があることを感じてほしい」と話す。

参加した中学生の一人は、「京都生協の取り組みには感謝しています。年に何度か南三陸にボランティアに来てくれるので、今度来てくださった際には、駆け付けたいです」と笑顔で話していた。

被災地の中高生と フォーラムで意見交換 コープみらい

コープみらい（当時・コープとうきょう）や岩手県生協連は、軽食付き自習スペース「山田町ゾンタハウス『おらーほ』」（岩手県山田町）を支援してきた。津波により甚大な被害を受け、学習塾が被災し、狭い仮設住宅での勉強を強いられるなど、子どもたちの家庭学習の場は激変した。そんな中、11年9月にオープンし、中高生の学習支援をしてきたのが「ゾンタハウス『おらーほ』」だ。

13年1月13日には、ゾンタハウスで学習する高校生6人と、宮城県の南三陸町で被災した戸倉中学を卒業した高校生4人が、支援者と意見交換をする「子どもたちと一緒に考える被災地の復興

支援者と意見交換をする高校生たち。自習スペース設置期間に制限があることについて「継続してほしい」という強い声が上がった。

支援の今後」（主催：東日本大震災子ども支援ネットワーク）が東洋大学（東京都文京区）で行なわれた。フォーラムの前日の1月12日、ゾンタハウスの高校生が、コープみらい本部を訪れ、ゾンタハウスの立ち上げ当初から支援している東洋大学の大学生や組合員たちと交流会を行ない、コープみらいからは「いつも応援している」というメッセージが直接伝えられた。

翌日のフォーラムでは、子どもたちから「家族の収入が安定しない中で、進学をあきらめる子もいる」などの現状報告や、「若い人も街づくりに関わられるようにしてほしい」といった意見が出された。さらに、「子どもという立場で意見を言っても無駄だと思っていただけ、そうではないことが分かった」「復旧、復興を自分たちが汚し張っていききたい」などの感想が述べられた。

東日本大震災子ども支援ネットワークの事務局で、東洋大学教授の森田明美氏は「この声を次につなげるために『大人の覚悟』と『子どもと大人が協働するプロセス』が大切」と話した。

14年1月11日も、コープみらいプラザ新中野で交流会が行なわれた。岩手県山田町と宮城県登米市、同南三陸町、福島県いわき市からの中高生16人、都内の中高生6人のほか、東洋大学の学生も多数参加。規模をさらに拡大して被災地3県





「子どもたちに楽しくご飯を食べてほしい」とコープふくしまが、13年1月24日に開催した食育イベントの様子。

の子どもたちの声を聞く取り組みが実施されている。

全国生協の支援金で、 食育活動を実施 コープふくしま

コープふくしまの共同購入拡大グループ郡山支部では、福島市、郡山市の保育園、児童施設で、仲間づくり活動とともに食育活動を行なっている。この取り組みを行なった背景について、郡山支部の施設・法人アドバイザーの穂積典子さんは次のように話す。

「震災直後、全国の生協さんから送っていただいた支援物資を各施設に持っていくと大変喜ばれました。支援物資を提供する中、今後私自身はどう応援できるのかを考えたときに食育活動をやりたいと思ったのです」

食育インストラクターの資格を持つ穂積さんは、現在週1回、野菜の効能などを分かりやすく説明したり、伝統食作りを教えたりしている。この活動で使う食材は、全国の生協からの支援金で提供されている。

「放射性物質の汚染が心配されている中、家庭ではなかなか『食育』という視点ま

で持つことが難しいのですが、少しでも子どもたちと保護者の方に、食べることに興味を持ってもらいたい」と穂積さん。

さらに、食育イベントに合わせて、生協の食材を提供したり、コープふくしまが取り組む除染の話や内部被ばく、外部被ばく測定の話なども実施。“食べることは命につながる”という思いを強く持ち、「食べ物との上手な付き合い方」を被災地で伝えている。

コープふくしまが行なうさまざまな取り組みと合わせて、穂積さんは、大変な状況だからこそ忘れられてしまいがちな食育の普及を進めている。

手作りおもちゃを 被災地の子どもたちへ コープおおいた

東日本大震災から2年目の、13年3月11日、コープおおいたの「佐伯エコチク委員会」は、この間さまざまな交流をしてきたコープふくしまを通して、手作りおもちゃを、福島の子どもたちへ贈った。この手作りおもちゃは、「遠く離れていても何かできることはないだろうか」との思いから、昨年よりエコチク委員会で制作し続け、1年間で多く

さまざまな種類の、温もりのある手作りのおもちゃが贈られた。



のおもちゃが完成した。またこの間、エコチク委員会の委員や、ふれあい交流会に参加した組合員、チラシを見て家で作った組合員などからも、おもちゃが寄せられた。

コープおおいたのたくさんの組合員の思いが詰まった手作りおもちゃは、コープふくしまの子育て委員会で大切に使用されており、子どもたちからも大人気だという。

コープおおいたの組合員が、福島県の仮設住宅へ支援に行った際には、福島で子育てをするお母さんたちからの「感謝の気持ち」が、コープふくしまの理事を通して伝えられている。

「学校図書館 げんきプロジェクト」 寄贈先の小学校で 本の活用

全国の生協・日本生協連

「学校図書館げんきプロジェクト」は活



生徒たちは量販きの図書室で、自由に本を読んでいた。



「学校図書館げんきプロジェクト」で購入された本の一部。

字文化推進会議と全国学校図書館協議会(略称・全国SLA)が中心となっており、東日本大震災で大きな被害を受けた岩手県、宮城県、福島県の小・中学校と高校、特別支援学校に本を寄贈する取り組みだ。特長は「本を必要としている学校へ、必要とされている本を、地元の書店を通じて渡す」という点にある。

「学校図書館げんきプロジェクト」は、11年12月に募金をスタート。日本生協連は、12年春に1回目として1,000万円、12年11月には2,600万円、13年3月には1,400万円、合計5,000万円を寄付した。これは全国の生協が取り組んできた「つながろうCO・OPアクションくらし応援募金」の募金から出ている。

福島県大熊町から会津若松市に避難している大熊町立熊町小学校と大野小学校の図書室では、休み時間(15分間)と昼休みを利用し、児童たちは思い思いの姿勢で寄贈された本を読んでいた。コロナと寝転ぶ子、本を見ながら絵を描く子、また生徒同士で読み聞かせをするグループもあるという。その他、これらの本は、授業中の調べ学習にも利用されている。

全国の生協から集められた募金は、子どもたちの学力の基礎を育むために役立てられている。

ふくしまキッズ博に 生協のキャラクターが集結 全国の生協



勢揃いした生協のキャラクター。写真左より、コープぎふ・たまねちゃん、エフコープ・アップルちゃん、コープネット・ほべたん、CO・OP共済・コーすけ。

2013年7月27、28日の2日間、福島県福島市にある福島県営あづま総合体育館で「ふくしまキッズ博」が開催された。

このイベントは、11年に発生した東日本大震災以降、放射能被害の影響で子どもたちが屋外で思いきり遊べない日々が続く中、笑顔で参加できる屋内イベントを行なって子どもたちに元気になってもらいたいという思いから、福島市内の官民学が一体となって開催したものだ。特別協賛団体として出展するコープふくしまより、「全国の生協の着ぐるみキャラクターが一堂に集まり、それぞれのキャラクターと福島の子供たちが触れ合う企画を行ないたい」との要請があり、全国から10生協(福井県民生協、コープぎふ、おおさかパルコープ、ユーコープ事業連合、コープネット事業連

合、コープあいち、コープいしかわ、コープみえ、パルシステム福島、エフコープ)とコープ共済連から計12体のキャラクターが集まり、コープふくしまの出展ブース周辺や体育館内を歩いて子どもたちと触れ合った。

今回のふくしまキッズ博には2日間で2万3,300人の来場者があり、「子どもの笑顔を増やしたい」というひとつの思いのもとに各生協が集い、協同の力を感じることができ大変貴重な機会となった。

放射性物質測定を 子どもたちが体験 コープふくしま

コープふくしまの「実際の食事に含まれる放射性物質の測定」(以下、食事調査)は、11年11月から開始され、12年度には2回行なわれ、13年度も継続して行なわれた。この調査は、福島県の家庭の食事を継続して測定していることから、行政や学術組織からもその結果に注目が集まっている。

13年4月5日、「放射性物質検査の見学・体験・交流会」が開催された。コープふくしまの組合員親子4組を含む16人が、埼玉県蕨市にある日本生協連商品検査センターを訪問。今回で3回目となり、「家庭の食事からの放射性物質摂取量調査」に参加した組合員親子に、実際の機械を使って放射性物質の検査を体験してもらった。

今回は組合員が持参したじゃがいもと水、米、大根の検査を実施。検査センターの職員に教わりながら、検査するための



13年4月5日に行なわれた、「放射性物質検査の見学・体験・交流会」。子どもたちが自ら、放射線量の測定のプロセスを体験した。

検体の前処理、検査容器への投入、計量、ゲルマニウム半導体検出器へのセット、計測と、一連の作業を全て体験した。検査結果は、セシウム134、セシウム137は各5Bq/kg未満だった。参加者からは「自分が思うよりも細かく検査をしているのだと感じた。こういう仕事があることを子どもたちが知る良い機会となった」などの意見が寄せられた。



交流会に参加した、コープふくしまの組合員親子たち。

関連資料

※以下の資料は、こちらのサイトで。 日生協 復興支援資料集 検索 (URL://shinsai.jccu.coop/tsunagaru)

■『生協運営資料』

◎資料番号3-2-3-301

この地で暮らし続けるために生協にできること(コープふくしま)
『運営資料』2013年3月・P38

■『つながろうCO・OPアクション情報』

◎資料番号3-2-3-401

みやぎ生協学校部が毛筆・硬筆書きそめ指導教室を開催(みやぎ生協)
『つながろうCO・OPアクション情報』第25号

◎資料番号3-2-3-402

被災地の高校生10人とフォーラムで意見交換
(コープとうきょう、岩手県生協連)
『つながろうCO・OPアクション情報』第25号

◎資料番号3-2-3-403

8生協・生協連が、「福島の子ども保養プロジェクト」を実施
(全国の生協)
『つながろうCO・OPアクション情報』第25号

◎資料番号3-2-3-404

全国生協からの支援金を使用し、食育活動! (コープふくしま)
『つながろうCO・OPアクション情報』第25号

◎資料番号3-2-3-405

「学校図書館げんきプロジェクト」へ5,000万円寄付(全国の生協)
『つながろうCO・OPアクション情報』第27号

◎資料番号3-2-3-406

食事調査、13年度も継続実施(コープふくしま)
『つながろうCO・OPアクション情報』第33号

◎資料番号3-2-3-407

復興の担い手の成長を実感「海の虹プロジェクト」(京都生協)
『つながろうCO・OPアクション情報』第34号

◎資料番号3-2-3-408

リサーチ「被災地のいま」 子どもたちを取り巻く状況
『つながろうCO・OPアクション情報』第35号

◎資料番号3-2-3-409

石巻のすべての小学校に学用品を寄贈(全国学校用品(株))
『つながろうCO・OPアクション情報』第36号

■ 復興支援ポータルサイト

◎資料番号3-2-3-501

福島の子ども保養プロジェクトin茨城「親子で星空観察ツアー!」を開催しました(パルシステム茨城 ほか)
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/01/in.html>

◎資料番号3-2-3-502

「福島の子ども保養企画inぎふ」を開催しました(コープぎふ)
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/01/post-102.html>

◎資料番号3-2-3-503

「福島の子ども保養プロジェクトinあいづ」を開催しました
(コープあいづ)
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/01/in-1.html>

◎資料番号3-2-3-504

手作りおもちゃを被災地の子どもたちへ(コープおおいた)
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/03/post-112.html>

◎資料番号3-2-3-505

「学校図書館げんきプロジェクト」～寄贈先の小学校を訪問
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/04/post-140.html>

◎資料番号3-2-3-506

コープふくしまの組合員親子が、放射性物質検査を体験
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/05/post-137.html>

◎資料番号3-2-3-507

春休み福島の子ども保養プロジェクト in 神奈川(2013)
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/06/-in-2013.html>

◎資料番号3-2-3-508

子ども保養プロジェクトでたこ焼きボランティア支援
～大阪いずみ市民生協
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/07/post-154.html>

◎資料番号3-2-3-509

東松島市の「子ども夏まつり」に参加しました～みやぎ生協
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/08/post-158.html>

◎資料番号3-2-3-510

第7回福島の子ども保養プロジェクトinいばらきを開催
～いばらきコープ
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/08/post-161.html>

◎資料番号3-2-3-511

「ふくしまキッズ博」に参加しました～エフコープ
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/08/post-163.html>

◎資料番号3-2-3-512

復興を担う次世代を支援「海の虹プロジェクト」～京都生協
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/09/post-164.html>

◎資料番号3-2-3-513

親子のためのジャズ・ライブを開催しました～福島県生協連
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/09/post-167.html>

◎資料番号3-2-3-514

「海の虹プロジェクト」 動画(京都生協)
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/09/-20138162057-81718.html>

◎資料番号3-2-3-515

宮城県山元町で被ばく測定を行いました～浜通り医療生協
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/10/post-172.html>

4 | 広域避難者への支援

東日本大震災では、地震・津波と東京電力福島第一原発事故により、多くの人が県外へ避難し、いまだ慣れない地で生活をしている。生協では、こうした広域避難者へのさまざまな支援も実施している。



医療生協さいたまによる、握力計測など健康（体力）チェックも行なわれた。写真は測定方法について説明するスタッフ。



13年8月29日に行なわれたサロンの様子。この日は、かき氷が振る舞われた。

埼玉県の避難所で サロンを毎週開催

コープみらい、パルシステム埼玉他

埼玉県加須市の旧騎西高校にある、東日本大震災の最後の避難所には、2013年9月9日時点で約100人の福島県双葉町の方が暮らしていた。避難所が開設された11年4月以来、コープみらい（当時・さいたまコープ）、パルシステム埼玉、JAグループさいたま、加須市女性団体

連絡協議会などのボランティアが協同して、毎週木曜日に炊き出しを行なってきた。

13年7月からは、お茶やお菓子を食べながらゆっくりとおしゃべりをする「おしゃべりサロン」の開催に変わった。サロンに来られない方には、ボランティアがサロン終了後に校内を回って訪問し、お声掛けなどの見守り活動も行なっていた。

コープみらい・埼玉県本部の福岡和敏部長は、「高齢者の見守りや子育て支援は生協が続けてきたこと。コープ商品もおいしいと喜ばれており、生協の『総合力』が支援活動に生かされています。炊き出しやサロンは目的ではなく、あくまで手段。皆さんの様子をサロン活動などでしっかり把握し、今できる支援は何かを見極めていくことが大切なのです。今後皆さんが避難所を出て、それぞれの場所に住む

ようになるとサポートの仕方も変わってきますが、できる限りのことは続けていきます」と決意を語る。

13年12月27日、全ての避難者が避難所を出た。お正月の餅つき大会が行なわれるなど避難者の集いの場となっているが、14年3月に旧騎西高校は完全に閉鎖される予定だ。市内で暮らす避難者の集いの場所が求められている。

東京都内の避難者に 心の交流の場を パルシステム東京

パルシステム東京では、13年1月29日、都内避難者への支援活動の一環として、新宿区に避難している被災者で組織した「青空会」（約100世帯）のイベントに参加し、交流会用のお茶菓子を提供した。青空会は12年7月に発足した、新宿区戸山台ハイツの避難者120世帯、約300人の会だ。青空会会長の山田さんからは「青空会主催は今回が初めて。生協が応援してくれるのが後押しになって自分たちでもやってみようと思った」と話す。

イベントは、劇団モクレンによる復興応援演劇でスタート。ある参加者は、「1人暮らしなので、こういう場に来て故郷が一緒の人と話すだけでも安心できる。今日は久しぶりに笑った」と語った。



「青空会」のイベント。50～80歳代を中心に、お昼過ぎまでに20人以上が参加した。

戸山台ハイツは、号棟によっては案内が掲示できないところもあり、一軒一軒ポストに投函したり、電話で知らせたりするなど、イベントの告知には課題も多い。集会場はあるが、高齢者はなかなか部屋から出て参加しようとはしない。また、同じ団地の他号棟の自治会と違い、集会所にテレビやカラオケがなく、大勢が気軽に集まって交流できる環境がまだ十分ではない。

参加者からは、故郷に帰れないことや、今後の生活の見通しを立てられないことへの不安の声が聞かれた。これからも息の長い支援が求められている。

パルシステム東京・復興支援特別委員会の廣川委員長（理事）は「都内避難者への支援について、今後一緒に考えていきたい」と話す。

避難者家族のための 「親子でスキーを楽しむ会」 生協共立社

被災地県から距離の近い山形県には被災した方が多く避難している。山形県の生協共立社では、13年2月10、11日の2日間、「親子でスキーを楽しむ会」を鶴岡市櫛引の「たらのきだいスキー場」にて開催した。この取り組みは、スキーを通して自然に触れ合い、共に学びあう活動で、福島からの避難者家族を含む6家族11人が参加した。

1日目の「歩くスキー」は前日からの大雪のため、ラッセルで雪を踏み固めて道を作りながら進んでいった。しかし、やわらかな深雪で腰近くまで埋もれてしまい散策は途中で断念、ゲレンデで歩くスキーを楽しんだ。午後は、子どもたちは、肥料袋で作った手作りのソリに興じた。

2日目は時折雪で目の前が見えなくなるほどの天候だったが、皆元気にアルペンスキーを行なった。初めてスキーを履く子もいたが、午後にはすっかり慣れ、上手



生協共立社主催の「親子でスキーを楽しむ会」。

にゲレンデを滑り降りることができるようになった。2日間スキーをした子どもたちは、「とても楽しかった。もっともっと滑ってみたいなあ〜」と笑顔で話していた。

食のイベントに 被災者6団体が参加 おかやまコープ

おかやまコープは、13年9月28日、組合員と生産者、メーカーの方々が交流する食のイベント「おかやまコープのハッピー・フードパーク2013」をコンベックス岡山で開催した。会場には193もの出店ブースが連なり、組合員や地域の方々など約1万9,000人が来場した。今回は、東日本大震災や原発事故により岡山県に移住を余儀なくされた方で、県内でお店や事業を始めた方に声を掛け、6団体が出店した。いず

れのブースでも多くの組合員が足を止め、商品を購入する姿が見られた。

震災から3年が過ぎ、被災地から他県へ避難している方も、生活をするために新たな職に就くなど、生活にさまざまな変化が生じている。被災地に戻るのか、このまま移住するのかなど、多くの問題が山積みになっている。地域のコミュニティーを形作る生協が、頼る人のいない人々をどのように支援していくかが今後の課題となっている。



「おかやまコープのハッピー・フードパーク2013」の会場の様子。



午前6人の避難者がリレートークを行なった。

広域避難者と 支援者が共に 今後の支援を考える コープあいち

13年9月26日、愛知県社会福祉会館で、コープあいちが参加している愛知県避難者支援センター主催の「東日本大震災・津波・原発事故による県外避難 私たちの抱える問題と支援を考える」が開催された。午前中は、愛知県に避難された方6人による、テーマを設けたリレートークが行なわれた。

福島県から母子で自主避難している一

人は、「愛知県に避難して1年半、家族や友人を残して、自分たちだけ避難してよかったのか、いまだに自責の念にさいなまれています。甲状腺の検査ができる病院を愛知県で探しましたが、内部ひびく検査は福島に帰らなければ受けられないといわれ



午後は避難者と支援者が共に、避難者の抱える問題の支援のあり方を考えた。

ました。どこにいても子どもが医療や健康調査をしっかりと受けられるようになることを希望している」と現在の複雑な心境を、涙ながらに訴えた。

福島県から避難した中国籍の男性は「原発の影響でトラック運転手の職を失い、原発近くの引っ越しの仕事で、毎日マスクをして仕事していました。しかし妻に、命がなくなるから辞めてほしいと言われ、仕事を辞めて愛知県に避難。1年3カ月たちますが、いまだ仕事が見つかっていません」と述べた。

午後からは、9つのグループに別れて、話し合いの場がもたれた。各グループは、被災地から愛知県に避難してきた当事者の方、支援者の方、専門家で構成され、一緒になって現在抱える問題の解決策を模造紙にまとめて、グループごとに発表した。

医師の沢田昭二先生は「この場に参加できて本当によかった。放射線の問題などは、科学的な安心を説いても、心の安心が伴わなければ意味がないことを痛感した。自分たち研究者も、当事者の方々の意見を聞く重要性を感じた」と話した。避難者と支援者が、共に考え問題解決の糸口を探る、貴重な集まりの場となった。

関連資料

※以下の資料は、こちらのサイトで。 日生協 復興支援資料集 検索 (URL://shinsai.jccu.coop/tsunagaru)

■『つながろうCO・OPアクション情報』

- ◎資料番号3-2-4-401
「応援してくれるのが後押しになりました」(パルシステム東京)
『つながろうCO・OPアクション情報』第26号
- ◎資料番号3-2-4-402
リサーチ「被災地のいま」 広域避難者
『つながろうCO・OPアクション情報』第28号
- ◎資料番号3-2-4-403
埼玉県の避難所でサロンを毎週開催(コープみらい)
『つながろうCO・OPアクション情報』第35号

■復興支援ポータルサイト

- ◎資料番号3-2-4-501
東京都内の避難者に、心の交流の場を(パルシステム東京)
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/02/post-107.html>
- ◎資料番号3-2-4-502
食のイベントに被災者6団体が参加～おかやまコープ
<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/10/6.html>

5 | 被災地から学ぶ

被災地の避難者や広域避難者が抱える問題は、現在の日本社会が抱える問題が凝縮したものでもある。生協では、そのような問題を一緒に考え、次の災害に向けた備えをそれぞれの経験から学び、自分たちが暮らす地域で、広げて行く取り組みも始まった。



コープこうべの「震災を考えるつどい」では、13年3月11日、14時46分に東北に向かって全員で黙とうを行なった。

これまでの活動を 振り返る 「震災を考えるつどい」 コープこうべ

13年3月11日、各地で東日本大震災をテーマにした会合が開かれる中、コープこうべ第3地区（神戸市東灘区～須磨区）でも「震災を考えるつどい」が開催された。主催は、震災後の支援活動を長く続けていこうと活動する「震災支援を考える会」と、「平和企画委員会」の両会。この日は60人もの参加があり、座席が足りなくなるほどだった。

岩本 衛組織統括の司会で進行し、藤本正子理事のあいさつに続いて、第

3地区コープ活動サポートセンター住吉の林 律子チーフによるビデオ上映と2年間の震災復興支援活動報告が行なわれた。発災直後の状況やみやぎ生協の奮闘、そして、被災地での物資運搬や店舗復旧作業などコープこうべが取り組んだ支援活動が伝えられた。

みやぎ生協からのビデオメッセージでは「いち早く駆け付けてくださったコープこうべの皆さんに感謝します」「（緊急支援物資として届けられたコープこうべのロングセラー）神戸ハイカラメロンパン、おいしかったです」などの声が届けられ、拍手が起こった。

林チーフは「緊急支援物資からメッセージカードづくり、ふれあいサロンの開

催など、コープこうべはずっと支援を続けています。メロンパンは象徴的なコープ商品です」と説明した。

続いて有志の組合員によるバスタオルを使った簡単な防災ずきん作りなど、くらしの中の防災対策の発表が行なわれた。非常食には特別な物を用意せず、普段食べ慣れている日持ちのする物やスポーツドリンクを、とのアドバイスなどにも参加者は熱心に聞き入っていた。

記憶を伝える 「東日本大震災学習・資料室」 みやぎ生協

みやぎ生協は、13年3月5日、「東日本大震災学習・資料室」（以下、資料室）を生協文化会館ウィズ内に開設した。震災の体験と、みやぎ生協の取り組みを後世に伝えることを目的に、写真や動画、関連資料を展示し、誰もが自由に訪れることができる。

中央に設置された円形のシアタールームでは、震災後のみやぎ生協と全国の生協の支援活動の様子をビデオで見ることができる。また、その周囲を巡る通路は展示スペースとなっており、県内の被災状況や、震災時の緊急対応から復旧・復興への取り組み、全国からの支援活動などを捉えた大きな写真が時系列で展示されている。見学者は音声ガイドを聞きながら、展示内容を見て学ぶことができる。シアタールームを囲む壁には、全国から寄せられた応援メッセージ入りタペストリーも飾られている。

塩釜・多賀城・松島地域代表理事の三浦久恵さんは、「全国の生協さんから助けられなければ、ここまでこれなかったです。現在も支援が続いていて本当にありがたいです」と感謝の言葉を口にする。石巻地域代表理事の大和き



みやぎ生協の「東日本大震災学習・資料室」の展示スペース通路には、東日本大震災による被害を伝える写真と、全国の生協からのメッセージが展示されている。



シアタールームでは、東日本大震災の混乱の中、みやぎ生協がどのような動きをしたかをまとめた記録映像を見ることができる。

よ子さんは、「写真を見ると胸が詰まります。資料室は、担当地域以外の状況もよく分かりますね」と話していた。

また、みやぎ生協では、Webサイト「東日本大震災からの復旧・復興をめざして」を開設。ここでも、みやぎ生協の震災直後の取り組みや、被災者支援の取り組み、地域産業復興支援の取り組み、そしてボランティアセンターについてなどを、項目ごとにまとめて紹介している。特に、震災直後の取り組みについては、災害対策本部、店舗、共同購入、共済の職員などが、どのように判



京都生協から贈られた「絆」のタペストリーを前に。塩釜・多賀城・松島地域代表理事の三浦久恵さん。

断して行動したかが、現場の写真とともにまとめられており、今後の災害に備えての多くの学びが詰まっている。

被災地の視察に訪れ 今後の取り組みを考える 全国の生協

全国の多くの生協が、被災地への視察を行ない、現状を知って今後の取り組みについて考える機会をつくっている。

13年3月下旬には、25～27日にコープおおいた、26日にコープぐんまが福島県を、25～27日にならコープが宮城県、岩手県を視察した。これらの視察は、現地の生協が企画・運営に協力しているところもある。

参加者たちは、震災の爪痕が残る場所を自分の目で確かめたり、仮設住宅の住民や手芸品などを作る団体との交流をしたりした。

福島県への視察に参加したコープぐんまの組合員からは、「福島の農産物を買って復興を応援したい」などの声が出された。

宮城県、岩手県を視察したならコープの中野素子副理事長は「被災地を訪れた理事には、帰った後、視察で学んだことを伝え、組合員と一緒に考えていく役目があります」と話す。ならコープからの参加者たちは、現地の生協のボランティアスタッフたちに、被災地の現状などについて質問をし、真剣にメモをとっていた。

他にも、年間を通して、全国の生協がさまざまな視察を行ない、各生協が被災地のためにできることを探すとともに、被災地での学びを、自分たちの暮らす地域づくりに役立てようという試みが続けられている。

被災地との交流を通して 防災やまちづくりに生かす コープあいち

コープあいちでは、13年4月、被災地での活動を報告する職員集会を2日間に



コープふくしまへの寄せ書きを贈るコープぐんまの組合員。(13年3月、福島県視察にて)

分けて開催した。14日には宅配事業と福祉事業の職員800人、17日には店舗事業の職員400人が参加した。被災地での支援活動や交流ツアーを通して関係を持った岩手県の方々を招き、これまで築いてきたつながりや、被災地での体験を生かして報告してもらった。

大船渡市で最も津波の被害が大きかった赤崎地区から参加した住民から

は、津波による被害を受けた赤崎地区の惨状が伝えられた。その後、公民館長からは、住民の声を聞きながらまちづくりを進めている様子が報告され、「われわれの土地は自然や海産物は豊かですが、その魅力を生かしきれていません。自分の顔は見えないものです。われわれの町の魅力を引き出すためにお力をお借りできたらありがたいと思っています」とメッセージが

伝えられた。これから本格的な復興が始まっていく中で、どのように被災地を支えていけるか、新たな課題が出された。

コープあいちの中野正二副理事長は、「2013年のコープあいちの被災地震災支援の活動計画では、こちらから岩手に伺うだけでなく、岩手からもこちらに来ていただく活動をしていきます。津波や地震の経験を今後の愛知県での防災対策に役立てるとともに、岩手県の皆さんにも愛知での取り組みを今後のまちづくりに生かしてほしい」と話しました。

今回、職員集会に参加した職員からは、「生協職員であることに誇りを感じた」「生協で働いていて本当によかった」という多くの感想が寄せられた。震災支援を通して生まれた「きずな」が、生協の職員



コープあいちの被災地での活動や被災体験などを、被災地の方が愛知県に来て語った。



コープあいちでは13年4月、2日間にわたる職員集会を開催した。



職員集会の後、食事を開催。マグロの解体をし、被災地の方々をもてなした。



米の全袋検査場でJA職員が説明。熱心に聞き入る参加者たち。(13年9月、「福島支援交流会」)

一人ひとりの心に届けられ、今後の被災地への長期的な支援の必要性を多くの職員が確めた。

福島の今を知り できることを考える 全国の生協、日本生協連

日本生協連は、13年9月20、21日に「福島支援交流会」を開催した。開催目的は、「福島を支え続ける思いを確認する」「“福島”の今を知る」「生協として、地域とともにできることを考える」の三点。参加者は、33団体170人だった。

はじめに「福島の子ども保養プロジェクト」「土壌スクリーニング・プロジェクト」「あんしん福島募金」など、これまで行ってきた福島支援の取り組みについて学んだ。その後、福島に暮らす方たちのリレー報告が行なわれた。また実際の食事に含まれる放射性物質量の測定とWBC*（ホールボディカウンター）測定を組み合わせ、組合員の安心につなげる取り組みや、仮設住宅で暮らす被災者の悩みや苦しさなどが報告され、福島の現状を共有した。さらに、「今後の支援で大事なと思うこと」「福島からみんなに伝えたいこと」というテーマでグループ交流を行なった。

2日目は、バス3台で、「二本松米全袋検査場」「奥の松酒造」「JA新ふくし

まモニタリングセンター」「土壌スクリーニング・プロジェクト」の視察を行なった。正しく放射線について学び、福島県産品に対する風評被害を防ぐという目的も加味され、充実した内容の交流会となった。

支援の継続を決意！ 「震災支援交流会」 全国の生協、日本生協連

13年11月15日、日本生協連は、震災支援交流会（西日本企画）を開催した。（参加者、17生協83人）

継続した支援で顔の見える関係をつくり、ともに支援を行なう生協の報告として、いわて生協ととくしま生協、みやぎ生協とコープこうべ、コープふくしまとコープみえと、被災地生協と支援生協が2生協ずつ被災地の今やこれまでの支援活

動についての報告を行なった。

さらに「支援から学び、次の災害に備える取り組み」について、コープあいちから、震災以降取り組んできた組合員から集めたタオルを被災地に届ける活動や、被災地での体験を生かした組合員活動としての「防災カフェ」の取り組みなどについて報告があった。

その後、5人ずつの16グループに分かれ、「これまでの被災地支援で良かったこと」「1年後にしたい活動」「これからの災害に備えて生かしたいこと」をテーマに交流、全てのグループが報告をした。「現地のニーズをつかむ」「日常を取り戻す支援」「心の支援」「手芸キットを送る」「ボランティアを支える」「買い支え」「地域の連携」「顔の見える関係」「継続した支援で次の支援につなげる」「親子で被災地スタディツアー」「防災カフェ」「支援から交流」など、多くのキーワードが出され、今後の支援のあり方を考える上で大きな収穫のある交流会となった。



継続した支援を誓って。左から、いわて生協、とくしま生協、みやぎ生協、コープこうべ、コープみえ、コープふくしま、コープあいち（2人）。

◎全国の生協による被災地・被災者支援の取り組み実績と募金累計

支援取り組み実績(2012年4月～ 2013年3月)	
被災地でのボランティア活動者数	14,509人
地元でのボランティア活動者数	4,219人
その他被災地支援の取り組みへの参加者数	60,924人
支援取り組み実績(2013年4月～ 2013年12月)	
被災地でのボランティア活動者数	10,054人
地元でのボランティア活動者数	5,316人
その他被災地支援の取り組みへの参加者数	43,666人

義援金(2011年度)	
日本生協連口座集約分	2,424,642,620円
会員生協の独自送金分	1,179,381,693円
計	3,604,024,313円
くらし応援募金	
2012年度集約分	348,962,066円
2013年度集約分※	68,371,587円
計	417,333,653円

※2013年度集約分は2014年2月12日現在

関連資料

※以下の資料は、こちらのサイトで。

日生協 復興支援資料集

検索

■『つながろうCO・OPアクション情報』

◎資料番号3-2-5-401

全国産直研究交流会で思い新たに(全国の生協)

『つながろうCO・OPアクション情報』第26号

◎資料番号3-2-5-402

「東日本大震災を忘れないつどい」開催(みやぎ生協)

『つながろうCO・OPアクション情報』第27号

◎資料番号3-2-5-403

写真で見る「被災地のいま」

『つながろうCO・OPアクション情報』第27号

◎資料番号3-2-5-404

全国生協からのメッセージ

『つながろうCO・OPアクション情報』第27号

◎資料番号3-2-5-405

くらしを守る、コープふくしまの取り組み

コープふくしま 野中専務講演録

『つながろうCO・OPアクション情報』第27号

◎資料番号3-2-5-406

「第2回つながろう CO・OP アクション交流会」開催

『つながろうCO・OPアクション情報』第27号

◎資料番号3-2-5-407

「震災2周年のつどい」開催(コープこうべ)

『つながろうCO・OPアクション情報』第27号

◎資料番号3-2-5-408

被災地の生協から全国の皆さんへ

いわて生協専務理事 菊地 靖さん

『つながろうCO・OPアクション情報』第28号

◎資料番号3-2-5-409

被災地の生協から全国の皆さんへ

みやぎ生協専務理事 宮本 弘さん

『つながろうCO・OPアクション情報』第29号

◎資料番号3-2-5-410

東日本大震災学習・資料室オープン(みやぎ生協)

『つながろうCO・OPアクション情報』第29号

◎資料番号3-2-5-411

被災地の生協から全国の皆さんへ

コープふくしま専務理事 野中俊吉さん

『つながろうCO・OPアクション情報』第30号

◎資料番号3-2-5-412

被災地の視察に多くの生協が訪れています(全国の生協)

『つながろうCO・OPアクション情報』第30号

◎資料番号3-2-5-413

「福島支援交流会」に全国から170人が参加しました

(福島県生協連・全国の生協)

『つながろうCO・OPアクション情報』第35号

■復興支援ポータルサイト

◎資料番号3-2-5-501

学びと交流with三陸気仙～被災地からの学びをどう生かすか(1)

(コープあいち)

<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/02/with1.html>

◎資料番号3-2-5-502

学びと交流with三陸気仙～被災地からの学びをどう生かすか(2)

(コープあいち)

<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/02/with-1.html>

◎資料番号3-2-5-503

学習会「神戸から宮城 長～いおつきあい」を開催しました

(コープこうべ)

<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/03/post-110.html>

◎資料番号3-2-5-504

「第2回 つながろうCO・OPアクション交流会」を開催しました

(日本生協連)

<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/04/2-coop.html>

◎資料番号3-2-5-505

震災2周年のつどい(コープこうべ)

<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/04/2-5.html>

◎資料番号3-2-5-506

「東日本大震災学習・資料室」オープン(みやぎ生協)

<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/05/post-142.html>

◎資料番号3-2-5-507

みやぎ生協Webサイト「東日本大震災からの復旧・復興をめざし

て」が完成しました

<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/05/web.html>

◎資料番号3-2-5-508

みやぎ生協の「震災学習・資料室」が、県のブログで紹介されました

<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/06/post-150.html>

◎資料番号3-2-5-509

「2013ヒロシマ虹のひろば」で被災地生協が取り組みを展示

<http://shinsai.jccu.coop/shien/2013/08/2013-1.html>

III 今後の支援を考える

INTERVIEW

いまだ道半ばにある東日本大震災からの復旧・復興。
これまでの活動を振り返りつつ、今後の支援のあり方について、
日本福祉大学社会福祉学部教授の村上徹也氏に伺った。



日本福祉大学社会福祉学部・教授
村上徹也氏

被災の有無を超えて これからの暮らしを 共に考えていく

広がる被災者間の格差

東日本大震災から3年がたちました。
これから被災地では、仮設住宅から高台
の造成宅地などへの移転が始まります。も
う一度、人が動くという状況になり、環境
変化に対応できる人と対応できない人が
できます。

特に高齢者や社会的弱者といわれて
いる方々の多くが、移転する余力がなく、
仮設住宅にそのまま住み続けたり、災害

公営住宅に移れても孤立を深める可能
性が非常に高くなります。結果、取り残さ
れる人々は、周りの人々と自分の置かれ
た環境の差を強く感じ、震災で負った心
の傷をさらに深めていくことになります。自
暴自棄になり、自らその深みにはまってい
く人もいます。

実は、阪神・淡路大震災の被災者で
孤立死する人が今もいます。こうした人々
にとって、震災はいまだ過去のものではな
いのです。

格差という点では、被災者への生活
補償の多寡や造成宅地の環境の違い
から、住民の間にあつれきが生じるなど、
地域の中での葛藤も生まれています。

また、転校先での学校生活への適応、
手狭で宿題をする場所もない仮設住宅
のくらし、公園や校庭に仮設住宅が建
ち、放課後に遊ぶ場所に事欠くなど、東
日本大震災は子どもたちにも大きな影響
を及ぼしています。放射線の恐れから自
由に外遊びができない子どもたちが、今な
おたくさんいます。

また、子どもたちの食生活の乱れも大き
な問題になっています。

仮設住宅では、近くで買い物ができる
のはコンビニエンスストアだけという所が
大部分です。仮設だと、小さな台所しかなく、
満足な料理もしにくい。つい親たちも子
どもにお金を与えて、「コンビニで何か
買って食べて」となりがちな点もあります。

こうした環境と運動不足があいまって、
子どもたちの肥満が増えてきています。子
どもたちの食生活が非常に危ない状況に
なっているのです。そして、あまり表面には
出てきていませんが、高齢者の栄養の偏
りなども容易に推測ができます。

地域の諸団体と 枠組みの検討を

生協は、この間の支援活動の中で、
持っている力を遺憾なく発揮されたと思っ
ます。

日頃から培った「顔の見える関係」を
頼りに、組合員の安否を確かめながら、
何が足らず、何が必要かという情報を素

早くつかみ、それに応じて物資を届け、食料支援を行ないました。

その後、時間とともに変化する被災地のニーズに応えながら、仮設住宅での日常的な交流・楽しみの場などの提供や、子どもたちが災害を乗り越えて成長するための支援も行なっています。

こうした生協の力は、今後の被災地支援を考えた場合、今まで以上に求められています。

被災地でのサロン活動や、子どもたちの自習の場に朝食を提供するなどの取り組みは、今の被災地のニーズにマッチしたものです。こうした取り組みを継続的に、そしてさらに広げていくために、被災地域の行政や社会福祉協議会などとの連携を一層強めていっていただければと思います。

先ほど、地域の中での孤立対策などの重要性を指摘しました。こうした地域の問題解決には、地域住民が主体的に関わっていくことが必要であり、その中核を担うのは、行政であり、社会福祉協議会であり、あるいはその地域に根ざした支援団体(被災地の生協等)です。

したがって、各生協が今後の支援活動のあり方について、地域の諸団体と打ち合わせをもち、どんな支援が求められており、そして自分の生協としてはどのような強みを発揮できるのかを話し合っていたいただければと思います。それが、被災地域の真の復興に直結する道筋です。

特に生協に期待したいのが、食の分野での力の発揮です。

生協は、料理教室開催や食育活動

などの食に関する組合員活動とともに、食品開発から販売(流通)までの事業的な展開も行なっており、被災地の人々の生活にさまざまな場面で関わっていくことができるのではないのでしょうか。

被災地生活が長引くと、今までサロンに出てきた人も閉じこもるようになります。けれど、人は、食材を購入しなければ生きていくことはできません。であるならば、例えば生協の移動販売と自治体が連携し、販売車が行くときに地域の民生委員などが各戸を訪問して買い物の手伝いをすれば、その部分で社会とのつながりができます。

学び、生かす

震災直後から被災地支援に関わる生協の方に私もいろんな場面で会いましたが、「生協だから支援に取り組むのは当たり前」との姿勢を強く感じました。大震災という非日常の緊急事態に直面したときに、「生協とは何か」をそれぞれが突き詰め、考え、行動に表したのではないのでしょうか。

そんな中で、生協がいろんな団体と手を組み、話し合い、協力し合う姿を見ました。他団体とのネットワークづくりという点で、飛躍的に進んだと思います。そして、連携活動の中で、地域ニーズの掘り起こしと具体的な対応策の組み立て、すなわち地域づくりという点でもいろんな経験を、個人のレベルで、そして組織のレベルで蓄積されました。

これらを今回の支援活動だけにとどめず、ぜひそれぞれの地域の中でも展開し



ていっていただければと思います。

被災地では、自分たちの経験を後世に伝えようという取り組みが始まっています。全国からの被災地への関わり方も、「支援」から「交流」へと質の変化が起きつつあります。交流の中から、お互いに行うことができるかを学び合うことにより、これからの取り組みの枠組みが見えてくるに違いありません。

生協は、生産者と消費者、あるいは消費者同士が、商品などを中心にして、互いの学び合いを生み出し、そして学びの成果を次の取り組みに生かしてきたと思います。

震災後の私たちの暮らしを、被災の有無を超えて共に考える必要に迫られている今、生協の力が強く求められています。

被災地のいま

震災から丸3年を迎えようとしている被災地では、住宅を再建する方が増える一方で、「このままここで死ぬのかなぁ」など不安を訴える声や、近隣トラブルも顕在化し、土地のかさ上げや工事車両の増加で粉じんが舞い上がり、呼吸器の不調を訴える住民が増え始めました。仮設住宅では結露がひどく、大規模仮設ではネズミ

が増えて衛生状態が悪化しています。年が明け明るい報告をと思っても、問題が多岐にわたり顕在化してきたことを感じています。

いわて生協
監事・被災地支援活動担当
飯塚郁子さん



いわて生協の移動店舗がスタートしたころに比べると復興は進んだのかもしれませんが、「進んだ」というには程遠い現状…。短い販売時間の中ですが、移動販売が地域の交流の場となるように取り組んでいきたいと思っています。



いわて生協
移動店舗けせんコース
リーダー
関村 剛さん



いわて生協
共同購入 宮古センター
班担当
佐藤和久さん

主に、地元の被災エリア（山田町）を配達していますが、復興が進んでいる状況とは言えず、家を建て仮設住宅から出ていく人、また、仮設住宅に新たに入居する人もいます。沿岸部から内陸へ転居する人が増え、過疎化が、近い将来これまで以上に深刻になるのではないかと心配です。私ができることは、業務を通じて生協の良さをお伝えして生活のお手伝いをする事。そして、地域のお役立ちにつなげていくことだと思っています。



いわて生協
復興支援チーフ
小野寺 真さん

復興するために、人々が集まりたくさんの協同の取り組みがすすめられてきました。地域・ふるさとを思い行動する人がたくさんいる。しかし、資金難から解散・撤退する団体も増えました。今後はそうした個人・団体が人・物・資金で連携し復興応援活動を続けることが重要になります。全国の生協の皆さん！引き続きのご支援よろしくお願いいたします。

色がなかった被災地も少しずつ明るさ、元気を取り戻しつつあります。汚染水問題、進まない除染、福島県はまだ多くの問題を抱え、未だに多くの県民が避難生活を強いられています。「うつくしま ふくしま」を少しでも早く取り戻し、安心して暮らしていける様になることを願います。



コープふくしま
理事
渡邊洋子さん

叶うなら前の時に戻りたい。これが本心かも…。でも戻ることが出来ないならば進むしか他にないと思っています。負けるわけにはいきません。人生をかけて次の世代の架け橋になるように努めます。



赤武酒造株式会社
代表取締役 古舘秀峰さん

職種の関係から全国各産地に
おじゃましています。感じる
ことは、福島の実況と各地の方々
が思っている現在の福島との認識
のギャップです。

マスコミの情報だけでは伝わり
きらない被災地の現状、今の福島
を、仕事を通じて伝えながら、支
援の必要性を訴え、震災の記憶が
忘れられないようにしたいと思い
ます。



コープふくしま
店舗部農産グループ
課長
二瓶洋一さん

震災後の原発被害で、自然豊かな
「あぶくま」山系の地域社会
が壊れ、家族単位の世代間の離散が
常態化してきています。「終の住処」
を奪われた老人たちは、悲惨です。
人とのつながりを持てるよう、全国
の生協とともに支援活動を行ないた
いと思います。



コープふくしま
移動販売担当
大宮満夫さん



みやぎ生協
専務理事スタッフ
五十嵐 桂樹さん

東日本大震災を風化させず、被
災地の現状を理解してもらうた
め、昨年9月から、全国60余の県連、
事業連合、単協に対し、毎月5日に『被
災地の今』という情報を発信し続けて
いる。その取材の中で、復興を妨げる
人口流出や地場産業の苦境、住まい
を巡る問題など、マスコミ報道だけ
では知ることができない本当に厳しい
現実を見た。

多くの被災地は震災前から過疎化
や少子高齢化などの問題を抱えてい
た地域だ。そのような被災地がどのよ
うな形で復興を果たして行くのかを
この目で見、そして全国の生協の仲
間に伝え続けたいと思っている。

3. 11大震災後、原発
事故のために慣れ
親しんだ町に戻れず、仮設
住宅で暮らしているの方
々が今でもたくさん近くに
います。避難されている
方々の心のケアが大切に
なっています。

笑顔で接客!!少しでも
心のケアのお手伝いがで
きたらと思っています。



コープふくしま
コープマートいずみ
ドライ担当
星 京子さん

「つくる たべる ずっとつながる」。宮城で生まれ
た商品を、ずっと美味しく食べていただくこと。
それが一番の「前に進む力」になります。これまでも、
そして、これからも。食のみやぎ復興ネットワーク。



食のみやぎ復興ネットワーク

食のみやぎ復興ネットワー
ク事務局
藤田 孝さん

震災から4年目を迎える被災地は、
「復興」の文字だけでは手作り商
品販売が難しくなったり、住宅の自力再建
した方をうらやむ声が出たりなど、今まで
とは別な問題や困難が出てきています。
そうした方々がほっとして笑顔になれる
機会を作りたいと、メンバーによるボラン
ティアがサロン活動などに一生懸命取り
組んでいます。全国の皆さんの支援が私
たちの元気の源。これからも継続した支
援をよろしくお願いします。



みやぎ生協
ボランティア活動担当
高村敦子さん

応援メッセージ

愛知県では県内に避難された約510世帯に毎年2回、お米を配布しています。そのお届けをコープが受け持ち、3年間で避難された95%の方のご様子を伺えています。「一人のための社会の協同」を全国の生協でかたちにしましょう。

コープあいち
参与
向井 忍さん



避難者からのお礼の
メッセージ

2011年10月に宮城に行ってお聞きした、「生協があって良かった」という言葉は、今でも心に残っています。仮設住宅にふれあいの場をつくり続けるボランティアの活動を、こうべ・大阪の組合員みんなで応援し続けます。



コープこうべ
理事

矢田部 佳子さん(写真：前列)

福島県と岩手県を訪問しました。現在がれき等は撤去されていましたが、福島県では除染した土が袋に入って高く積まれていました。縁があって支援活動に関わらせていただきました。今後も自分に出来ることを行ないます。



コープぐんま
参加とネットワーク担当
竹本尚美さん
(写真：前列右)

昨年は福島の子どもたち総勢50人を北海道に招きました。子どもたちの笑顔から、この活動の大切さと意義を強く感じています。北海道でも放射線被害に対する関心が少しずつ薄らいでいるように感じられます。これからも、引き続き福島の子どもたちの保養企画の呼び掛けを通じ、支援活動を続けていきます。



コープさっぽろ
組合員活動部
竹田明仁さん



エフコープ
無店舗事業本部
安元正和さん
(写真：後列左)

「震災のこと、そして私たちのことを忘れないでほしい」という被災地からの声に応えて、遠く離れた福岡の地でも、「いつまでも、ずっとそばに」の思いを込めて多くの方が関われるような取り組みをこれからも続けていきます。



被 災地から一番遠い沖縄から支援を継続することが、協同組合としてのコープおきなわの価値が問われると考えています。歴史の痛みを知る地の生協として、これからも、「肝心（ちむぐくる）」（沖縄の方言で「深い想い」）を大切にします。

コープおきなわ
理事長
山本靖郎さん
(写真：後列左)



生協コープかごしま
会長理事
和田 千恵子さん(写真:左)
副会長理事
田中 加代子さん(写真:右)

福 島を訪れるたびに、「私には何ができるのだろうか?」と自問しています。明確な答えはまだ見つかっていません。ただ言えることは、「震災・原発事故で起こったことを忘れてはいけない」ということです。私はいつまでも福島に寄り添っていきたいと思います。

富山県生協
ネットワーク部 組合員活動グループ
松本亮祐さん(写真：後列左から4人目)



福島の子ども保養プロジェクト（コヨット!）参加の子もたちと一緒に「エイエイオー!」

福 島の子ども保養プロジェクトが始まって3年目に入ります。福島第1・第2原発の廃炉は決まりましたが、いつ作業が終わるかの目途は立っていません。週末保養で山形を訪れる子どもたちに、思いっきり体を動かし、心身ともにリラックスできる時間（短い時間ですが）を提供し続けていきたいと思っています。ボランティアの皆さんの後ろで雄たけびを上げている子どもたちが、福島県で安全で安心して外遊びが出来る日が早く来ることを祈りながら、週末のおもてなしをボランティアの皆さんと相談し、満足していただけるよう頑張ります。

生協共立社
組織本部
介護福祉事業 村山地区担当
遠藤文雄さん

応援メッセージ



なんといっても、彼らのあの真面目さ！誰が見ている訳でもないのに、只ひたすらこの凍てつく寒空の中コツコツと計測し続けている姿に感動を覚えています。「どじょスク」で教わることが沢山あります。ありがとうございます。

ならコープ 人事総務部 山本寿子さん(写真：左)

パルシステムグループでは「福島の子どもたち保養プログラム」をはじめ、被災した皆さんを支援してきました。復興の道程は長いですが、今後も避難生活を送る人、避難せずに苦しんでいる人などさまざまな立場の人に寄り添っていきます。



パルシステム連合会
支援に関わる職員一同



東京都生協連
荒井伸幸さん

当連合会では、東京へ避難されている方の交流サロンへの協力や、社会福祉協議会の協力のもと、孤立化防止支援として、東京に避難している親子と地域の親子を対象に交流や居場所づくりとしてサロンを開催し、参加者に寄り添う支援や交流活動に取り組んでいます。また、2013年3月までの2年間、東日本大震災被災者支援活動に取り組んだ宮城県登米市への被災地交流訪問活動や、福島県への支援活動に取り組んでいます。これからも、会員生協や他団体と連携し、被災地や避難者の方へ寄り添う活動を続けていきます。

あれから3年。被災地の人々の心と体はこれまで一体どれだけ消耗されてきたことでしょう。でもそれが決して無駄ではなかったと実感する時がきっと来ると信じています。その時が来るまで、私は応援し続ける決意です。

京都生協
店舗商品部 地産地消推進担当
福永晋介さん(写真：右)



「本当においしい！」広島のお好み焼きを通じて、一緒に口ずさんだ歌を通じて、心が繋がったことを実感！現地の状況に言葉をなくし、人々の奮闘に脱帽、優しい笑顔に元気をもらいました。広島への思いが現地に届くよう、これからも活動を続けていきます！

生協ひろしま
福祉事業部
岡 由香里さん



「福島復興支援交流報告会」に講師で参加交流された福島のリンゴ生産者の高橋勘重さん(写真:右)

コープおおいた
代表理事 理事長
青木博範さん

「何」も言わずにリンゴを丸かじり。うまい!と言われ、嬉しくて涙が出た。来年はもっとおいしいリンゴを作る」福島の生産者、高橋勘重さんが大分の現地報告会で決意した一言。支援活動は被災者に寄り添うこと。そして“思い”を重ねていくこと。

神奈川県内でさまざまな形で被災地・被災者支援を続ける皆さんの結び目となります。会員生協・協同組合の活動の広がり連携を応援します。引き続き、保養プロジェクトや復興支援まつりに取り組みます。



神奈川県生協連
専務理事

丸山善弘さん(写真:前列左から2人目)

「私」にできる事を!」の思いが言葉になり、形になり、被災者の方々の心に寄り添った支援活動を続けていきたいと願っています。時と共に変わっていく支援を見据え、被災地から発せられるメッセージに関心を持ち続け、私たちにできる支援で寄り添い続けていきましょう!!

コープかがわ
参与(震災支援担当)
石井アイリーニさん



ボランティア活動に参加されている柴田さんご家族(知美さん:左から2人目)

お互いに顔が見え、想いがつながる支援活動を継続していきます。遠く離れてはいますが、賀川豊彦の教えである「被災者の目となり、耳となり、口とならなければならない」を肝に銘じ、県民に被災地の「今」を伝えます。

生協しまね
安井光夫理事長(写真:前列右端)と組合員(理事)

東日本大震災から、まもなく3年目を迎えます。復興と言うには、程遠い現状です。それでも、東北の方々は、復興のために懸命に歩もうとしています。その姿を記憶に焼き付け、心に寄り添えるボランティア活動を家族で続けたいと思います。特に時代を担う若い世代に、多く参加してもらうことを強く望みます。

大阪いずみ市民生協
組合員
柴田知美さん



2014年2月28日

記録・生協の「つながる力」2013

WEB 生協・東日本大震災被災地復興支援資料集 連動冊子

発行：日本生活協同組合連合会（渉外広報本部）

〒150-8913 東京都渋谷区渋谷3-29-8 コーププラザ

Tel:03-5778-8183(出版G)

